
バカとテストと召喚獣 ~バカと未来と過去とFクラス~

月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと召喚獣 ↗バカと未来と過去とFクラス ↗

【NZコード】

N5875X

【作者名】

月

【あらすじ】

主人公（らしき人物）、西崎瑠美は文月学園内で学力1位の実力をもつ人物。そして、昔から瑠美と仲がよかつた吉井明久、姫路瑞希、渡辺直貴。

特に直貴は瑠美に続いて、学力2位の実力をもつ。

しかし、この二人。自分達も知らない過去をもつ人物でもあった。仲のよい四人組はFクラスでどんな生活をおくっていくのか？

プロローグ（前書き）

はじめまして
バカテスの小説を書くのは始めてで、迷うこともありますが、頑張
つて執筆したいと思っています

プロローグ

文月学園

科学とオカルトと偶然というわけの分かんない理屈で生み出された試験召喚システムを取り入れた学校進学校であると同時に最新技術の実験場としても知られるこの学園それ故に、多くのスポンサーが付いており学費は極めて安い

学園にまで続く坂道の両脇には新入生を迎えるための美しい桜が咲き誇っている

そんな坂道を、鼻歌を歌いながら歩いていく少女が一人いた。

Side 瑠美

「～～～～～」

今年も桜がきれいだな

ここに入学してから一度目の春がきたんだな

今年も楽しい学園生活があくれるといいな

そう思いながら、私、西崎瑠美は校門までスキップをしていった。

校門に到着すると、筋肉隆々とした体格のいい教師が立っていた。えつと確かあの人は・・・

「鉄人先生。おはようございます」

「西崎・・・だよな?ついにお前もそんなことを言つようになつたか・・・」

「冗談です。西村先生、おはようございます」

「お前のは冗談に聞こえないんだが……まあいい。ほら、受け取れ」

そう言って、てつじ——西村先生は私に茶色い封筒を渡した。
お? クラス分けの結果かな?

「それにしても西崎、残念だつたな。あの時ちゃんとテストを受け
ていればAクラスだつたんがな」

「いや~、しうがないですよ。ちゃんと自分の体調管理をしてな
かつたですもん。責任は自分にありますから」

「そうか」

「それに、来年もありますから その時にがんばりますよ

「なるほど。お前らしい考えだな。先生も応援するぞ」

「ありがとう」やこ ます てつじ——西村先生

「……西崎。いくらなんでも成績を下がらせるんじゃないぞ。
・・・」

「分かってますよ それぐらことはー」

そう言って鉄人の言葉を頭の中に入れておき、校舎の中へと入つて
いった。

向かうクラスは・・・・・

西崎 瑠美
『Fクラス』

Fクラス! ! !

五分後

Side 明久

やばい！！

新学期早々遅刻だ！！

そして急いで足を早くする僕。

校門近くにくると、

「遅いぞ吉井、渡辺！…」

ドスのきいた声で、鉄人が遅刻してきた二人の名前を呼んだ。
ん？一人？

横をみると、あのティーズオグレセスの主人公、アベルにいた少年が僕と同じく息切れをしていた。

髪の色は焦げ茶色で、目の色は紫。

「明らかにアベルの色違いバージョンの少年だ。」

「おい、明久。声にでてるぞ」

「やあ。おはよう直貴。君も遅刻？」

「今、明らかにスルーをしたよな！？」

「え？なんのこと？僕にはなにも分からぬよ

「嘘付け！…」

「ええい。黙らんかきさまら！…」

鉄人の怒鳴り声で、僕たちの言い合いは終了した。

「全く貴様らは…………、言い合いの前に俺に言つことがある

だろ」

「あ、そうでしたね。おはようございます鉄人」

「おはよう西村」

「貴様らは遅刻の謝罪よりあいさつが大事、しかも教師の名前もろくに言えないとは何事だ！……」

「おーおい、鉄人。俺はちゃんと西村つていつたぜ」

いや、今鉄人つていつたから。

「西村先生だ……吉井は別名、渡辺は呼び捨てで呼んだだろ！……はあ……、貴様らに言つても無駄だな……。ほら、クラスわけの結果だ」

そう言つて、鉄人は僕たちに茶色い封筒を渡した。

「あ、ビーもでーす」

「サンキュー」

「しかし、渡辺は居眠りさえしなければ△クラスだつたんだがな……」

「じょうがねえじやん。前日緊張して眠れなくてつい寝ちゃつたんだからよ」

それ、遠足に行くのが楽しみでなかなか眠れない小学生じやん。

「明久。今お前、俺のこと遠足に行くのが楽しみでなかなか眠れない小学生だと思わなかつたか？」

「気のせいじやないかな？」

ちつー！

まさか心をよみとられるとは。油断した！……

「ていうか俺、途中一回だけ起きたぜ」

「ああ。確かに西崎さんが倒れたときだったたつけ？」

「そうそう。それそれ…………って、なんでお前知つてんだよ」

「だつて、保健室で会つたじやん」

「……………」

「……………」

「話はもういいからわざと自分のクラスを確認しろ」

「「はーい」」

ん？

くつ、なかなかあけられない。

おもいつきりのりがくつついている。

よし、気合いであけよつ。

「そういえば吉井。今だから言つがな」

「ん?なんですか」

僕は封筒と戦いながら鉄人の話をきく。

「俺は去年お前を一年見て、もしかしたら吉井は『バカなんじやないか』と疑いを抱いていたんだ」

「それは大いなる間違いですね。そんなことを言つているよつじや、そのうち『節穴』という徒名がつきますよ」

僕はバカではない。

だつて、振り分け試験はちゃんとできたもん。

「明久。現実を見ろ」

「何をいつているのを直貴。僕は正氣だよ?」

「はあ…………、お前とこりやつは……」「やつこり、直貴はめだい」のクラスなんだよ」

こいつ。

僕が苦戦してるなか、楽しそうに封筒を開けていやがった。

「あ？俺？ほら」

渡辺 直貴

『Fクラス』

「俺は居眠りしてたからな。全然、問題を解いていなかつたからな」

「なんか、ムカつるのはなぜだらつ…………」

「まあ、とにかく。すまなかつたな吉井お前を疑つてしまつて
「分かればいいんですよ」

さすがに氣合いでは開けられないか…………、じゃあ破くか。
そしてやつとのこと封筒を開けられた。
中に入つている紙を取りだし広げる。
書いてあつたことは、

吉井 明久
『Fクラス』

「お前は疑いの余地もない、正真正銘の馬鹿だ！」

なんですよ――――――――

「そんな、意外にいけたと思つたのに……」

「まあまあ明久。お前にしてはよくやった（笑）」

「直貴。絶対心の中で馬鹿にしているだろ！…」

「なんのことだ明久。俺は同情してあげただけだ」

「嘘だ！…！」

「さて、クラスも分かつことだしどとと行くぞ明久」

「さりげなくスルーされたし…しかも、何事もなかつたように歩き始めたし！…ちょ、待つてよ直貴！…！」

そして僕達二人は校舎の中に入つていった。

はあ…………。

そうだとしてもかなり悔しい。

CかDクラスに入れたと思ったのに…………。

「残念だが明久。いくらFクラスに入んなくとも、C、Dクラスには入れなかつたと思うぞ」

「なぜ！…！…ていうか、なんで人の考へてることが分かるの…？」

「お前の頭の悪さから、せいぜいE、Fクラスが限界だ」

「はつきり言われたあああああ…！」

「お。ここがAクラスか」

「え？」

直貴の方を見ると、もはやホテルというしかない豪華な教室があつた。

「すごい…………、ノートパソコンに個人エアコン、冷蔵庫にリクラインシングシート。うらやましい…………」

「俺はなんとなく嫌だな……」「

「なんで？」

「機械音痴だからだ」

「なつとくだよ」

トヒルアケルハルヒトハシテハシタガシテハシタ

六
七
八

僕の言葉を聞かないで、直貴は僕を引きずつていった。そして、B、C、Dクラスを通りすぎてEクラスを通りすぎようとすると、目の前に、茶髪でお団子ヘア（しかし、後ろ髪を残しているしかも長め）の少女がいた。

「お~い!! 西崎さん!!」

僕の声に反応して少女は振り返った。

「あ！ 明久に直貴！！！」

そして、笑顔でこっちにきた。

「おはよう」一人とも

「おはよう、因幡さん」

そして、西崎さんは直貴に超かわいいスマイルを見せた。

くそつ……

羨ましからぬぞ直貴！……

「それにしても明久、面白い格好だね。よくそんな状態でしゃべれるね」

え？

現在の僕の格好

直貴に引きずられていつた体勢

つまり

自力で後ろを向いている。

首がいたい。

「…………直貴。そろそろ離してよ

「ああ、そういやそうだったな」

ふつ……。

やつと、普通にたてるよつになつた。

「そういうや西崎さんもFクラスなの？」

「うん。途中退席は〇点だからね」

「それじゃあ、早くいこつか」

「うん。後、昔みたく呼び捨てでいいよ。私も呼び捨てで呼んでるんだから」

「いや、でも……」

「呼び捨てで呼ばなかつたら…………分かつてるよね？（黒笑）

「（でた、瑠美の暗黒モード）

「はいはい……喜んで呼び捨てで呼ばせていただきます……！」

「」

「明久。今の発言、変態がいうセリフにそっくりだったぞ」

「失礼な！！！」

「ところで瑠美。『クラスで大丈夫なのか？』

「うん なんか楽しそうだし それに……」

そして、瑠美は僕のそばまでよってきた。

すると、僕の耳に爆弾発言をした。

「直貴もいるから嬉しいしね （／＼／＼＼）」

こんな爆弾発言をしてから、瑠美は僕と目を合わせた。爆弾発言をしたため、顔が赤い。

そんな瑠美に、僕はこんなことをいつてあげた。

「応援してるよ。瑠美！」

「うん ありがとう明久」

「？」

二人で何を喋っていたのか、直貴は気になっていたのか頭につマーケを浮かべている。

「よし……じゃあ行こつか……」

「うん……レッヅ」「…………」

「あ、おい待てよ…………」

いよいよ、僕達の高校二年生の生活が始まるんだ！！！！

プロローグ（後書き）

次回はオリキヤラ紹介を行います

オリキヤラ紹介（前書き）

オリキヤラ紹介です

はつきり言って主人公が決まっていません（泣）

オリキヤラ紹介

西崎 瑞美 (にしざきのみ)

身長 160?

体重 瑞美に殴られたため不明
胸はFカップ

見た目 茶髪でお団子をしている。しかし後ろ髪を残しているしかも長め。

目の色はオレンジ色

趣味 体を動かす 音楽を聞く 料理

得意科目 数学 化学 古典 家庭

苦手科目 日本史 物理 国語

特技 水泳 空手 料理

詳細 明るい性格で、元気いっぱいの少女
もちろんクラスの人気者
(学年の中で一番もてる)

試験中、途中退席したためFクラスになつた。

美人だが意外にも空手が得意らしく、その実力は全国1位の実力。
そのため彼女を怒らせると痛い目にあつ。

それでもなぜかもてる。明久、直貴、瑞希とは昔から知り合いで仲良し。

直貴のことが好きだが、なかなか想いが伝わらない。
友達のことを馬鹿にされるのが嫌い。

特に明久、直貴、瑞希の悪口をいうやつには容赦しない。
恥ずかしがりや性格でもあり、ちょっとびり泣き虫なところと、怖がりなところがあるのでそこがもてるのかもしない

得意科目の数学、化学、古典、家庭ではAクラス以上の実力だが、苦手科目のなかでも特に苦手な物理は10点。

召喚獣は、チャイナ服を短くした感じの服に雄一の召喚獣と同じく拳で戦う。

（拳の装備はゴールドアーマーズという物）

もちろん腕輪も持っているし、召喚獣にも特殊な効果がある。

腕輪 色はクリア
効果は『シンクロ共鳴』

相手の召喚獣の動き、次にする行動が分かるようになる。それに追加して、自分が言った攻撃名の攻撃をしてくれる。必殺技も可。しかし、この時、召喚獣と一体化していくようになるので、召喚獣が受けたダメージは自分にもくる。（つまり観察処分者になる）消費点数は100点

召喚獣の特殊効果
発動キーワード
『スタイルエンジ』
教科が変わった時に使える効果
使った時は、その教科の点数が倍になる。
ちなみに姿も変わる。

渡辺 わたなべなおき
直貴

身長 168?

体重 54?

見た目 テイルズオブグレイセスのアスベル

髪の色は焦げ茶色

目の色は紫

趣味 運動 寝る

特技 剣道 陸上

得意科目 国語 物理 化学 保健体育

苦手科目 数学 英語 家庭

詳細 強そうな体格だが、根は優しいやつ。

試験中、いねむりをしていたためFクラスになった。（しかもその理由が、前日に緊張しすぎて眠れなかつたという、小学生なみの理由）

しかし、一回だけ起きている。

剣道が得意で、竹刀がなくとも枝や定規などあればそこいら辺の不良を一発で倒せるほどの実力しかし機械音痴である

明久、瑞希、瑠美とは昔から知り合いで仲良し。この頃瑠美のことが気になつて、なかなか顔を合わせられない
果たして瑠美の想いが伝わるときはくるのか？
雄一、明久と鉄人から逃げるのが得意（ていうか、最早達人級）
努力をしない人物が嫌い
後、瑠美を泣かせたらマジでキレる（後ろに魔王が登場するような感じ）

得意科目は全てAクラス以上

しかし、苦手科目のなかでも特に苦手な英語は10点

召喚獣は、見た目がアスベルにているせいか、召喚獣自身もアスベルと同じ姿
もちろん、武器は剣

腕輪 色は金色

効果は『オーバーリミッジ』

相手の召喚獣の動きをとめ、一回だけ必殺技を決めることができる。
消費点数は200点

この状態の時は自分の召喚獣は光っている。なお、瑠美の召喚獣がいるときに発動すると合体攻撃ができる。

金沢 豊 (かねざわゆたか)

身長 170?

体重 58?

見た目 ボカラの鏡音レンのよつな髪型

色は茶髪

目の色は赤

趣味 音楽を聞く

特技 喧嘩 運動

得意科目 保健体育 数学 化学

苦手科目 国語 古典 日本史

詳細 美波と同じくドイツからきた帰国子女。

そのため、美波とは知り合いである。

正義感が強く、困ってる人はほっとけない性格
逆に友達を馬鹿にするやつには制裁をする
振り分け試験を受けていないためFクラス

美波とそこで再会している。

明久達とは美波の紹介で仲良くなる。

鉄人からはたまに追いかけられるので、その時は雄一達と素晴らしいコンビネーションを見せる。

得意科目はAクラス以上の実力

苦手科目でも、せいぜいDクラスなみ

召喚獣はガンマン

武器は一丁の銃。（装備は知っている人は知っている、マイソロ3のレイディアントの装備）

簡単に言えば、マントにサングラスにズボンに袖無しのTシャツ

腕輪 色はオレンジ

効果は『ラストバトル最終決闘』

自分の召喚獣が、戦死する直前に発動できる。

その時の点数を倍にしそのまま、その点数でやり直すことができる。

消費点数 時間がたつていくことに50点引かれていく

この小説のオリキャラ達は、勝つ直前に必殺技の名前を言います
そり辺は気にしないでください

オリキャラ紹介（後書き）

どうでしたか？

腕輪の能力がめちゃくちゃですみませんでしたm(――)m

もし、問題があればいつくださーい

では

第一話 暴言と紹介と登場（前書き）

バカテストは次回から行います

第一話 暴言と紹介と登場

Side 瑠美

わ～…………。

これはひどいね～。

現在、私と明久と直貴はFクラスの前で固まっています。

何故かつて？

あまりにもボロいからだよ…………。

「これは意外だな…………」

「まさか、こんなに酷かつたなんて…………」

「まあまあ明久、直貴。きっと教室の中では温かく迎えてくれるよ

「だといいんだがな…………」

「もう、直貴ったら。それじゃあ私から入るよ」

そう言って、私は教室に入つていった。

「すみません。おそくなり……「早く座れ。」のウジ虫野郎…………
なつ！？」えつ！？」

入つた瞬間、温かく迎えてくれる言葉ではなく暴言をはかれた。

「うつ…………うつ…………（泣）」

「す、すまん！……しつきり明久かと…………「美女を泣かせるとほ
い一度胸だあああああああ…………なつ！？ギャアアアアアアアア
…………」

私が泣いた瞬間、教壇の上にたつていた赤い髪でトゲトゲの髪型の男子は、黒いフードを被った人物達に襲われた。

「すみません。おそらくり……つて、瑠美どうしたのー!?」

うえ あ、 明久 ゲスッ（泣）

「どうしたの!? なんて泣いて…… どうした? 明々…… つて、瑠美! ? なんで泣いてるんだ! ! ? ? 」あ、それ僕のセリフ

「ううう……直貴、明久……私つてウジ虫野郎なの……？（泣）」

卷之三

「あの人」

そして、私は赤い髪の人をさした。

「よし、分かつた。明久。瑠美を頼む」

二
了解

「お！！！そこには、直貴と明久か！？助けてくれ
つて、直貴！？なぜ、背後から魔王がでて来てるんだ！？」

「川三三ナカセタヤツ二口ス……二口ス……二口ス！……！」

「?ねえ、明久。なんで目隠しするの?」

「知らない方がいいよ瑠美。ていうか見ちゃダメだ」

？」

明久の言つてゐる言葉が、よく分からなかつた。

Side 明久

あの後。直貴の魔王化は消えず、誰も止められなくて焦つたけど、先生がきて騒ぎはなくなつた。

が直貴。そのとなりが瑠美だ。

「おーい雄一。生きてる~?」

ああ……………なんとか……………

一ルミヲナカセタカテタ

たから あれには理由があるんだよ!!

おもひだの「」

あ、直貴の魔王化がおさまつた。

- - - 94

なるほど。本来なら明久が言われるはずだったのか」

「貴様ああああああああああ！」

僕はウジ虫野郎なんかじゃない！！！

「それにしても、ここは教室はひどいな……」

「そう？ ちやふ台てなんか和風じゃない？」

「こや、ちやぶ台の事じゃない。この教室全体の事だ」

「そりゃ、なんで雄一は教壇に立っていたの？」

「ああ。俺がこのクラスでトップだったから、先生がくるまで立っていたんだ」

「じゃあ、貴方が代表なんだね！！」

「お、おお。坂本雄一だ。よろしくな」

まあそりゃ慌てるよね。

瑠美の目は少女漫画に出てくるような目だから。

それに、噂では学年で一番の美女とか言われてるからね。

「え～、そこの四人。静かにしてください。ホームルームを始めます」

なんて四人で喋っていると、先生に注意された。

「皆さん。各自座布団とちやぶ台はありますか？」

『先生一。座布団に綿が入っていないんですけどー』

『我慢してください』

『先生一。すきま風が寒いんですけどー』

『我慢してください』

『先生一。ちやぶ台の足が折れたんですけどー』

『それなら、このボンドを使って直してください』

……。

流石、最低クラス。

「それでは、自己紹介でもしますかね。え～、では、廊下側の人からお願いします」

すると、廊下側の席の一人が立ち上がった。
あれは……

「木下秀吉じや。演劇部に所属しておる」

やつぱり……

瑠美の次に美少女といつ美少女の秀吉だ……
ああやつて、男の制服を着てているけど実は女の子なんだ……

「おこ……明久……なんで女子が男子の制服を着てるんだよ……！」

ほら……直貴も、目を疑わせるよ……！

「お主……ワシは男じやぞ！？」

『秀・吉……』 10 ve you……』

「だから、ワシは男じや ああああああああああああ……！」

クラスのみんなが秀吉にラブホールをおくつているなか、秀吉は必死に叫んでいた。

「可愛い……お人形にしたいくらい……」

『なに！？』

瑠美の一言にクラス全員が固まつた。

「ど、とにかくわしは男じや……！」

と言ひながら秀吉は座つた。

「……土屋康太……」

この静かな声はムツツリー……
相変わらず無口だな

「……趣味はどうぞ……何でもない……」

そして、性格も相変わらずだな。

「…………です。よろしく」

どんどん、紹介が終わっていく。

次に立つた人は女子だ。

あの人も見たことがあるな……、確か

…………

「島田美波です 海外育ちで日本語は会話ならできますが、よみか
きは苦手です。あ、英語も苦手です。育ちがドイツなので、趣味は

…………

やつぱし島田さんだ。

なんかFクラスは、知り合いが多いな。

「趣味は金沢豊をボコる」ことです、」

「おい、ちょっとまで美波……！……殴るならまだしも、ボコるは酷
すぎるだろ……！」

そして、全員性格が変わってない。

あれ？でも、今の男子は見たことないな……。

島田さんの知り合いかな？

「たく…………。金沢豊だ。美波と同じくドイツ育ちだ。日本語は別に苦手ではないし、英語も苦手じゃない。今年から、JUJUに通うことになった。ちなみに、美波とはおさ馴染みだ」

一部の男子がカツターナイフを出すおと

「あ、そりそり。喧嘩なら堂々とこいよ? 全員、病院送りにしてやるからな」

サツ
一部の男子がカツターナイフをしまうおと
へゝ。島田さんと同じドイツ育ちなのかへゝ。
後で話しかけてみようへゝ

そしてどんどん紹介が進んでいき、次は僕の番となつた。

「バカ…………」

今は忘れよう。
次は直貴の番だ。

「よしつ。次は俺だな」

「自己紹介で、失敗する馬鹿はいねえよ…………」

そう言つて直貴は教壇の方に向かつた。

「渡辺直貴だ。よく、テ○ルズオブグレ○○○の主人公に似てると

言われるんだが気にしないでくれ。剣道が得意で、もし明久や瑠美にてを出したら…………『ウシャナクロス…………』

ヤバい…………また魔王化した…………

『ま、魔王！？』

もちろん、突如魔王化した直貴にびっくりするクラスメイト達。とやこへ

「な～に。自己紹介でクラスメイトを脅かしてんのよ、このバカ直貴…………」

ドガツ…………

「グハツ…………」

ドサツ…………直貴が倒れるおと

瑠美がいち早く、直貴に鉄斎を下した。
そして、自分の紹介をした。

「え～と。やつはこの直貴が脅かして」「めんね。私は西崎瑠美！
！趣味は音楽を聞く」と、運動をする」と……これからよろしくね」

『可愛いいいいい…………』
「ほにゃー？」

瑠美の満面の笑顔で、クラス全員が心をうたれた。

「あ、そういうえばいい忘れたけど。直貴と明久とは昔から仲良しなんだ特に直貴とは一番仲がいいよ」

「あのなあ、瑠美。わざわざそんなこという必要なんか……

……つて、あぶね…………」

ん?

うわっ…………危な…………

「な、なんかカッターナイフが飛んできた…………」

『次は逃さん…………』

『この一人に死を…………』

ちよ、ちよ。危険だよこれ…………

「な、直貴…………何とかしてよ…………」

「何とかしてほしいなら、俺のちやぶ台の上にある木刀をとつてくれ…………」

こ、これ!?

ていうか、学校に木刀なんか持つてきていいの!?

「明久…………早くしろ…………」

「え!?あ、は、はい…………」

僕は、勢いよく木刀を直貴の方に投げつける。

パシッ!!!! 直貴が木刀を受けとる

「おし…………いくぜ…………」

『シネエエエエエ…………』

クラスメイトが一気に直貴の方へ向かつていった。

直貴が木刀を構える。

すると、

「あ、 そうそう。 私、 友達を傷つける人は嫌いなんだ、 特に直貴と明久を傷つける人は」

『みんな、 席につけ!!!!』

『ラジヤー!!!!!!』

瑠美の一言で、 襲いかかってきたクラスメイトは全員座つた。

「うふふ おもしろい 」

「男子で遊ぶなよ.....」

「いいじやん別に。 あ、 みんな!!!! 仲良くしようね!!!!!!」

『瑠・美!!!! i l o v e y o u!!!!!!』

すごい。 秀吉以上のラブコールだよ。

そして、 瑠美と直貴が席についた瞬間

ガラガラガラガラガラ

教室のドアがあいた。

「あの… 遅れてすいません」

『え?』

登場した人物に、 クラス全員が驚いた。

「ちょうどよかつたです。 姫路さん。 今自己紹介中なので、 姫路さ

んも自己紹介をしてください」

「あ、はい。姫路瑞希です。よ、よろしくお願ひします！…！」

登場した人物は、普通このクラスにいない人物。

姫路瑞希さんだった…………。

第一話 再会と理由とガールズトーク（前書き）

今回からバカテストを入れました
ではどうぞーー！

第一話 再会と理由とガールズトーク

バカテスト 化学

第1問

【調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグニシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグニシウムの代わりに用いるべき金属合金の例をひとつ挙げなさい。】

姫路瑞希・西崎瑠美・金沢豊の答え

『問題点……マグニシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点
合金の例……ジュラルミニン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのです
が、姫路さんと西崎さんと金沢君は引っ掛けませんでしたね

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払つていなかつたこと』

教師のコメント

そこは問題じやありません。

吉井明久の答え

『合金の例……未来合金（すいごん）（すいごん）』

教師のコメント

すいごん強いといわれても。

渡辺直貴の答え

『合金の例……「ゴールドアームズ』

教師のコメント

それは西崎さんの召喚獣の装備です。
しかし君は化学が得意と聞きましたが、本当に得意なんですか？

Side 瑞美

嘘…………。

瑞希…………。

「はい……質問です……」

「あ、はい。なんでしょつか」

と思つてみると瑞希は誰かに質問された。
いきなりの質問にびよつとパニクつている。

「どうしているんですか？」

わづかひとつ言い方を考えようよ……。

「あの、えつと……。テスト中高熱をだしてしまったんですね……」

「そういえばそうだった。」

瑞希は高熱をだしたんだった。

「西崎さんと渡辺君にも質問です……どうして君達もここにいるんですか？」

「えつと、私も急に倒れて途中退席になつたの……」

「俺は居眠りをしていて〇点になつたんだ」

やつぱり、直貴の理由は小学生並だよ……。

『そういうや俺も熱（の問題）がでてFクラスに』

『ああ、化学のだろ？あれは難しかつたよな』

『俺は弟が事故に遭つたと聞いて実力を出しきれなくて』

『黙れ一人つ子』

『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』

『今年一番の大嘘をありがと』

す』……（逆の意味で）。

『じつをつたら、そんなこと言えるんだろ。』

「で、では、一年間よろしくお願ひしますー！」

そんなんか、逃げるよつて瑞希は明久と雄一の隣の空いている机をぶ台に着こつとした。

「あ、緊張しましたあ～……」

席に着くや否や、安堵の息を吐いた。

すると、明久が声をかけようとした。
頑張れ明久！！！

「あのせ、姫　　「姫路」あつ…………」

残念ながら、明久の声にかぶせるように雄一が声をかけた。
残念明久！！！

「は、はいっ。何ですか？えーっと…………」
「坂本だ。坂本雄一。よろしく頼む」
「あ、姫路です。よろしくお願ひします」
「ところで、姫路の体調は未だに悪いのか？」
「「「あ、それは私も（僕も）（俺も）気になる」」

気になっていた言葉を発すると、見事に直貴と明久と私の声が重なつた。

どうやら、直貴と明久も同じことを思っていたらしい。

「あ、明久くんに直貴くんに瑠美ちゃん！？」

私達三人の登場で、瑞希はチヨーびっくりしていた。

うーん。そんなに驚かなくてもいいんだけど…………。
ていうか、明久はショックを受けてるし。
すると、

「「あ～、姫路（瑞希）。明久がブサイクですまん」」

その明久に止めを指すよつた言葉を、雄一と直貴がいつた。
ていつか、直貴…………。

「雄一はともかく、なんで直貴まで…？」

「すまん。明久。つい本音が」

「直貴…………」

「ん？ なんだ瑠美」

「…………見損なつた」

「なつ！？ （――――――） ショックになつている

うん。本当に見損なつたよ直貴…………。

しかし

「そ、そんな！ 目もパツチリしてゐるし、顔のラインも細くて綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ！ その、むしろ…………」

その一言で明久はショックから立ち直つた。
立ち直り速！！！

「そう言えば、俺の知人にも明久に興味を持つてゐるやつがいたような…………」

へ～。

明久つて、いろんなところでモテてるんだね～。

「え？ それは誰…………」

「そ、それつて誰ですかっ！？」

「瑞希。落ち着いて」

「確か、久保」

ん?

何か嫌な予感

「 利光だつたかな」

えつと、まとめると…………、
…………。

久保利光（性別／）

結果 B』

だよね…………。

あ、明久がさつきよりショック受けてる。

「おい明久。声を殺してさめざめと泣くな

「僕もうお婿にいけない…………」

「大丈夫だよ。私がもううから

「 「ええ！？」」「

「なにつ！？」

「な！？瑞美何てことを！？ていうか、みんな！？カッターナイフ

をおろして！！！」

『全員突撃！！！』

『おお…………』

「ちょ！？直貴助け つて、直貴！？なんで木刀を構えてるの！？」

「アキヒサ…………イクラシンゴウデモユルサン！……」

「ちょっと待つて！……マジで待つて！……」「みんな本気こゝすぎ。」「談ごな。」「談

その瞬間、直貴は木刀をおろし、他のひとはカツターナイフをおろした。

瑠美……。冗談を言つても次は僕の命がなくなると思つていて

「分かつたわよ。もう冗談は言わないから安心して」

それに、今直貴が反応してくれたから余計安心した
(――――――)

「え～。畠さん静かにしてください」先生がてを叩く

バラバラバラバラ……………
教卓が崩れ落ちる

۷

「ええ。替えを持ってきます。皆さんは自習をしていてください」

そう言って、先生は教室を出ていった。
本当にボロいわね。

「あ、あはは……（苦笑）」

さすがに瑞希もこれには苦笑いをしていた。

「…………雄一、ちょっとここに?」

「「」」じや話しへいから、廊下で」
「別に構わんが」

明久が雄二と一緒に廊下に出ていった。
直貴はいいのかな?と思つて隣を見ると……、

「…………いない」

いつの間にか消えていた。
雄二にいつたんだろ?う?

「あの、瑠美ちゃん!」

と思つてこると瑞希から顔をかけられた。

「ん? どうしたの瑞希?」
「あの、話したいことがあるんですけど……」
「なんの?」
「ちょっと、「」」じや話しへいんですが……」
「小声で話せば大丈夫だよ」
「そうですか? それじゃあ「」」じや話しへいんですけど」
「んで? 話したいことつて?」
「あの…………、瑠美ちゃんは明久くんのことをどう思つてるんですか?」
「へ?」

流石にびっくりしたので口をパカッと開けた。

「どうして…………、友達と見てるけど…………」
「そ、その。異性として見てませんか?」

「うん」

「や、やつですか」

ピン

なるほど。だから瑞希は私に聞いたんだね。

「安心して瑞希」

「え？」

「私が異性として見てるのは、明久じゃなくと直貴だから」「え、え？」

「だから、瑞希の恋が実ることを応援するよ」

「る、瑞美ちゃん……べ、別に私は「好きなんでしょう? 明久のこと」

「うつ、は……は……（／＼／＼／＼）」

「だつたら頑張らなくちゃね お互い頑張ろつ」

「は、はい！」

意外…………。

まさか瑞希が明久に好意を抱いてたなんて…………。これは応援
しなくちゃね

「あの。瑞美ちゃん……、実はお願いが……」

「ん? なになに?」

「わ、私に料理を教えてください……」

「え? 料理?」

「は、はい……」

「なんで急に…………あつ」

思い出した。

瑞希は料理がドヘタなんだ。

砂糖と塩の分量を間違えたり、毒物をいれたりとにかくドヘタだつ

たんだ……。

そのせいで直貴が中学の頃、隣されながら病院に入院してたつて。流石に今年も犠牲者を出すわけにはいかない！……！

「いいよ」

「ほ、本当ですか！？ありがとうございます……！」

「その代わり、私が許可したときしか料理をすることが禁止ね……」

「そ、それぐらいお安い」用です！！！」

「おし！…料理に慣れるまで教えてあげるからね……」

「はい……」

もつ高校生なんだから、料理ぐらしあげると出来るのは少なくちやね。

Side 明久

「んで。話つてなんだ？」

「このクラスの設備のことなんだけど……」

「ああ。想像以上にひでえな」

「Aクラスの設備見た？」

「ああ。最早教室とは言えないほど、豪華だつたな」

「そこで提案なんだけど、Aクラス相手に試合戦争をしてみない？」

「…………何が目的だ？」

「いや……。僕はただ、あまりにもこのクラスの設備が「おいおい。嘘つくなよ明久」な、直貴！？」

「お前は瑞希のためにAクラスに試合戦争をやるひつとしてんだろう？」

「バレバレだぜ」

「うつ…………」

「顔に出てるからな」

「雄一まで…………」

「ひ、…………。」

「一人とも敏感すぎたよ…………。」

直貴はともかく、雄一までにバレるなんて…………。

「まあいいだる。ちようど俺もそつじよつとしていたからな」

「え？ 雄一も？」

「ああ。でも、本当にいいんだな明久」

「もちろん！――！」

「後、直貴と…………そこにはいるお前もな」

「え？」

「は？」

「なにいつてんの雄一。」

「誰もいないじゃないか。」

「出てこよ。確かに…………、金沢豊だつかな？」

すると、なぜか天井からボカ〇の鏡〇〇〇〇〇の髪型にそつくりな男の子が落ちてきた。

あれ？ 確か、この人もFクラスだつたような…………。

「よく分かつたな。俺が天井に潜んでるなんて」

「俺達が出ていく前に、お前が出ていくのを見たからな。もしかしたらと思つて言つたんだ」

「ほ～。流石だな。まあ俺もAクラスに試召戦争を仕掛ける提案はいいと思つぜ」

「よし。決定だな」

「明久。後悔だけはするなよ」

「そうだぜ。明久」

「ありがとう。雄一、直貴、豊くん」

「あ、俺のことは呼び捨てでいいぜ」

「やう? ジャア、遠慮なく呼ばせてもいいよ」

「お。先生が戻ってきたな。教室に戻るぞ」

第三話 宣戦布告とお廻と始まり

バカテスト 国語

以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- 【（1）得意なことでも失敗してしまつ】と
- （2）悪いことがあつた上に更に悪いことが起きる喻え】

姫路瑞希の答え

- 『（1）弘法も筆の誤り』
- 『（2）泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にもありますがそれは渡辺くんが答えてくれました。

渡辺直貴の答え

- 『（1）河童の川流れ』
- 『（2）踏んだり蹴つたり』

教師のコメント

正解です。これが君の実力といつことでしょうか？

土屋康太の答え

- 『（1）弘法の川流れ』

教師のコメント

シユールな光景ですね。

吉井明久の答え

『（2）泣きつ面蹴つたり』

教師のコメント
君は鬼ですか。

金沢豊の答え

『（2）瑠美に浮気がばれボコボコにやられる直貴』

教師のコメント

最早それは教師のてにはおけません

西崎瑠美の答え

『（2）かかとおとしをやり過ぎて捻挫しました』

教師のコメント

それは渡辺くんをボコボコにするときにしたのですか？それとも岩を壊していく時にしたのですか？

S.i.d.e 瑠美

私と瑞希のガールズトークが終わった瞬間、明久達が戻ってきて、替えの教卓をとってきた先生も戻ってきた。
まあ、どうせボロいしまだ壊れると想つけどね。

「では自己紹介の続きをお願ひします」

「えー、須川亮です。趣味は

また自己紹介が再開して、どんどん流れしていく。
そして遂に、最後の雄一に回ってきた。

「それでは、最後は代表の坂本君に閉めてもらいましょう。坂本君
前へ」

「はいはい」と

先生に呼ばれ雄一は教壇の上にたつた。

「Fクラス代表の坂本雄一だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

やつぱり代表の人つて、ハキハキしているからいいよね。

「さて、皆に一つ聞きたい」

そう言って、雄一は全員の目を見るように告げる。

「かび臭い教室。古く汚れた座布団。薄汚れた卓袱台」

みんな雄一の視線を追い、それらの備品を順番に眺めていった。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしい
が

「

一呼吸おいて静かに告げた。

「
不満はないか？」

『 』『 』『 』『 』『 』『 』『 』『 』

ここでクラス全員の声が重なった。

最早魂の叫びだね（汗）

「だろう？俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

「もうどううじを抱いている」

『 そ う だ そ う だ ！ ！ ！ 』

『いくら学費が安いからと言つて、この設備はあんまりだ！改善を要求する！』

やつぱりみんな不満なんだ。

「みんなの意見はもつともだ。そこで」

雄一は自信に溢れた顔に不敵な笑みを浮かべて、こうつげた。

「これは代表としてね提案だが、『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

S
i
d
e
直
貴

Aクラスへの宣戦布告。

これは、明久が考えたことだ。

もちろん、このFクラスにとっては現実味の乏しい提案にしか見えないだろ。

『勝てるわけがない』

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんがいたら何もいらない』
『西崎さん。結婚して』

そんな悲鳴が教室内のいたるところから上がった。
ていうか誰だ、瑠美に告白したやつ。

「みんな！！最初から諦めちゃダメ！！後、今告白した人は嫌い！
！」

『『『どうもすみませんでした！……』』』

なんだ、こいつら…………。

「確かに無理があるが、勝つことができる要素があるんだ。今から
説明してやる」

勝つことができる要素？
なんだそりや。

「おい、康太。畠に顔をつけて西崎のスカートを覗いていないで前
にこい」

「…………（ブンブン）」

「え？ わつ…………」

必死になつて顔と手を左右に振り否定のポーズを取る康太と呼ばれた男子生徒。

ていうか、瑠美のスカートをのぞいただと?
よし後で詳しく聞くか…………。

しかも、今頃気づいたのかよ瑠美…………。

珍しいなあいつが今頃気づくなんて。

んで康太とか言つやつは、顔についた畠の後を隠しながら壇上へと
歩き出した。

なんか、Fクラスって個性的なやつがいっぱいいるな。

「土屋康太。こいつがある有名な、寡黙なる性識者だ」

「…………（ブンブン）」

「ムツツリーー？ そういうや聞いたことがあるな。男子生徒には恐怖と畏敬を、女子生徒には軽蔑を以て挙げられているやつか？」

『ムツツリーーだと…………？』

『馬鹿な、やつがそうだというのか…………？』

『だが見る。あそこまで明らかに覗きの証拠を未だに隠そっとしているぞ…………』

『ああ。ムツツリーの名に恥じない姿だ…………』

「そして、姫路瑞希もいる。皆だつて姫路の力はよく知つてているはずだ」

『そうだ。俺たちには姫路さんがいるんだつた』

『彼女ならAクラスにもひけをとらない』

『ああ。彼女さえいれば何もいらないな』

なんかさつきから、姫路にもラブコールをおくつていゆやつがいるな。

「木下秀吉だつている」

『おお…………！』

『ああ。アイツ確か、木下優子の…………』

「そして、西崎瑠美と渡辺直貴もいる。この二人は学園でトップの成績をもつ二人だ」

『そりだ！！！俺たちには西崎さんと渡辺がいるじゃないか！！！』

『西崎さん…………結婚して…………』

『西崎さん…………結婚して…………』

『いいや。俺と結婚して……』

『そういえば、確か俺と瑠美は学園で1位と2位を争う実力だ、って
聞いたな。』

『その前に今瑠美に告白したやつ殺す……。』

『そして金沢豊もいる。金沢はAクラスより上の実力をもつ男だ。
振り分け試験の時はまだドイツにいたらしいから、振り分け試験を
うけられなかつたそつだ』

『なに！？ そんなに頭がいいだと！？』

『流石、帰国子女は違うな！？』

『いや。それは関係ないと思つんだが……。』

『当然。俺も全力をつくす』

『確かになんだかやつてくれそつなやつだ』

『坂本つて、小学生の頃は神童とか呼ばれていなかつたか？』

『それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だつ
たのか』

『このFクラスには実力はAクラスレベルが五人いるつてことだな
！』

『いつきに教室内はいけそつだ、やれそつだといつ雰囲気になつた。
しかし

『それに、吉井明久だつている』

……シン

士気が上がつていつたのに、この一言で一氣に下がつていつた。

「ちょっと雄二ーー。どうしてそこまで僕の名前を呼ぶのさー。全くそんな必要はないよね！」

『誰だよ、吉井明久つて』

『聞いたことないぞ』

『こいつは学園始まって以来最初の『観察処分者』だ！』

『……それって、バカの代名詞じゃなかつたっけ？』

「ち、違うよ！ちょっとお茶目な十六歳につけられる愛称で」

「そうだ。バカの代名詞だ」

『肯定するな、バカ雄二ーー！』

すまん明久。俺もそう思つてしまつた。

「あの、それつてどういうものなんですか？」

「具体的には教師の雑用係だな。力仕事とかそういう類いの雑用を、特例として物に触れるようになつた試験召喚獣でこなすといった具合だ」

「そなんですか？それつて凄いですね！」

「だが、実際は役に立たない雑魚だ」

「雄二ーー。そこはフォローしてくれたつていいよね！？」

『やつぱり。観察処分者つてただ単の雑魚なんだな』

『それにどうせ、吉井はバカなんだろ？いなくたつて平氣じやないか』

「でも、試験召喚獣つて見た目と違つて力持ちだから、運よく使つと便利なものだよ」

お。瑠美がフォローをいた。

『西崎さんが言つならそのとおりだよなーー！』

『流石西崎さん！ーー！』

ほんとになんだこいつら…………。

「とにかくだ。俺達の力の証明として、まずはロクラスを征服してみようと思う。そしてこのバカ（明久）にはロクラスへの宣戦布告の使者になつてもらひ。無事死んでこい！……」

最低の一言だなおい。

「やだよ……せめて、直責ついてきてよ……！」

「残念だが、敵に直責がいることをバレることになら駄目だ。もちろん瑠美もな」

「それじゃあ、俺がついてきてやるうか？」

「え？ 豊が？」

「まあ。金沢なら大丈夫だ。金沢のことを知っているのは俺達だけだからな」

「と言うことだ。行こうぜ明久

「あ、うん」

「よし。皆、この境遇は大いに不満だろ？？」

『当然だ！！』

「ならば全員筆を執れ！出陣の準備だ！」

『おお――――――――――！』

「俺達に必要なのは卓袱台ではな――――システムデスクだ――――！」

『うおお――――――――――！』

「お、お――――――――――！」

「楽しそう～ 久しぶりにやりがいがあるね

「おいまて瑠美。これは殺しあいじゃないからな？」

「分かつてゐるよ そんぐらー」

嘘つけ…………。

数分後。

Dクラスに宣戦布告にじにいつた明久と豊が戻ってきた。
話によると、襲いかかってきたので豊が制裁したらしい。
微妙に雄一が悔しがっていたのは気のせいか？

Side 明久

「さて。それじゃあミーティングを行つか」

僕たちは今、昼食とミーティングをするために屋上へと向かっている。

ちゅうっと後ろを見ると、

「……………（サスサス）」

ムツツリーーが自分の頬の辺りをさすっていた。

「ムツツリーー。覗いていた時の量のあとならもう消えてるよ？」

「……………（ブンブン）」

「いや、今更否定されても、ムツツリーーがHなのは知ってるから」

「……………！（ブンブン）」

「HJまでバレているのに否定し続けるなんて、ある意味凄いと思

う

「……………（ブンブン）」

「何色だった？」

「白」

即答か。

「やつぱりムツツリーーは色々な意味で凄いよ

「……………（ブンブン）」

「おい。お前ら早く」

そんな話をしていたら、直貴に呼ばれた。

「あ、うん」

「…………（スタスター）」

「あ、後明久」

「ん？」

「テメエ、アトデブツ ロロス」

「なんで！？」

なぜか直貴に死の宣告をされた後、雄一が勢いよく屋上の扉を開いた。

「さて明久。宣戦布告はしてきたな？」

「一応今日の午後に開戦予定と告げてきたよ」

「じゃあ、まずはお昼御飯が先ね」

「明久。今日ぐらいまともな食べ物食べよう」

「そう思うなら、パンぐらじおじってよ」

「え？ 吉井くんって、お昼食べない人なんですか？」

「いや。一応食べてるよ」

「…………あれは食べていると言えるのか？」

「何が言いたいのさ」

「いや、お前の主食って 水と塩だろ？？」

「失礼な！ きちんと砂糖だつて食べているさ…………」

「明久…………。それは食べるとは言わないぜ…………」

「舐める、が表現としては正解じゃろうな」

見ないで！！！そんな妙に優しい目で僕を見ないで！！！！

「ま、飯代まで遊びに使い込むお前が悪いよな」

「し、仕送りがないんだよ！－！」

「へえ。明久つて一人暮らしなんだ」

「うん。両親が仕事の都合で海外にいるからね」

「ていうか。お前よくそんなんで生きていたよな」

直貴の言葉が僕の心に、グサッと刺さったような気がする。

「あの、良かつたら私がお弁当作ってきましょうか?」

「え？ いいの？ 姫路さん」

「はい。明日の午前でなければ」

やつた!!姫路さんの手作り弁当!!楽しみだな~。

「あ、ちょっと待つて！――私も作つてくる――」

「え？ 瑠美も？」

「うん。瑞希と共にでないでしょ？」瑞希上

「あ、
はい」

え? ところが、姫路さんと瑠美が作ったお弁当が食べられるん

たよね？

「あ、そういえば。みんなとも作ってみたがいいよ。」

「マジか！？」

「ラッキーだな

「樂しみじやの」

「…………（「ク「ク）」

「お手並み拝見つてことね」

「あれ？直貴。なんで震えてんの？」

「…………（ガタガタブルブル）」

「（安心して直貴。なるべくあんたには、あたしの弁当を食べさせるから。ていうか、皆を犠牲にはしないから）」

「（そ、それなら安心だな…………）」

？

二人で小声で何喋つてんだる。

「さて。試召戦争の話に戻るぞ」

「雄一。一つ気になつていたんじやが、どうしてDクラスなんじや？段階を踏んでいくならEクラスじゃううし、勝負に出るならAクラスじゃうう？」

「そついえ、確かにそつね」

「まあな。当然考えがあつてのことだ」

「どんな考え方なの？」

「色々と理由はあるんだが、とりあえずEクラスを攻めない理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからな」

「え？でも、僕らよりはクラスが上だよ」

「ま、振り分け試験の時点では確かに向こうが強かつたかもしけないな。けど、実際のところは違つ。オマエのまわりにいる面子をよく見てみろ」

「えーっと……」

「雄一に言われたとおりその場にいるメンバーを見回してみる。ふむ、この場には、

「天使一人と美少女一人と美男子一人と馬鹿が一人とムツツリが一

人いるね

「天使って誰ですか！…吉井くん！…！」

「…「誰が美少女だと…？」」

「姫路さん落ち着いて……ていうか、なんで直貴と雄一と豊が美女で反応するの…？」

「私は女子なのに美男子扱いか」

「…………（ポツ）」

「瑠美とマッシュワーーーまだー…？どうしよう、僕だけじゃシツコミ切れないと…！」

「まあまあ、落ち着くのじゃ歯の衆」

「じゃ」で、美少女秀吉が止めにはいった。まあ、男なんだけじね。

「そ、そうだな」

「全く、明久が変な」と言つから

「そうだそ、明久」

「いや、僕のせいじゃないから……だいたい美少女のところで反応する三人が悪いんでしょう……！」

「ま、要するにだ」

「コホン、と咳払いをして雄一が説明を再開する。

無視！？僕の言葉は無視なの…？」

「姫路、西崎、渡辺、金沢に問題のない今、正面からやりあつてもEクラスには勝てる。Aクラスが目標である以上はEクラスなんかと戦つても意味が無いってことだ

「？それならDクラスとは正面からぶつかると厳しいの？」

「ああ。確實に勝てるとは言えないな」

「だったら、最初から目標のAクラスに挑もうよ」

「初陣だからな。派手にやつて今後の景気づけにしたいだろ？それ

に、さつきいいかけた打倒Aクラスの作戦に必要なプロセスだしな」

あ、あのー！」

「ん? どうした姫路?」

「えっと、その。やつきにいかけた、つて……吉井くんと坂本くんは、前から試合戦争について話しあつてたんですか？」

「ああ、それか。それはついさっき、姫路の為について明

卷之三

あやうく言われるところだった。

「さつきの話、Dクラスに勝てなかつたら意味がないよ」

「負けるわけないさ」

「隨分と余裕なんだね……。そこも代表の考え方で」とかな?」「うう。お前らが俺に協力しないからなら勞てやる

「協力？」

いいか、お前ら。うちのクラスは最強だよ。

なぜか、雄一の言葉が本當になるよつた気がしてきた。

「いいわね。面白そうじゃない！」

「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

「…めが…めが…めが…」

「本気をだすか」

「……さういふことをせんせーは、おおきなおもてなしをうながすやうだよ。

打倒Aクラス。

みんな多分、そう思つている」ことだらう。

「やうか。 それじゃあ、作戦を説明しよひ」

大丈夫。 僕達ならいける！－！－！僕たちは最強なんだ！－！－！

第二話 血戦布告とお嬢と娘めつ（後編）

次回、いよいよロククラス戦ですーー！

第四話 ロクラス戦 その1

バカテスト 物理

問 【以下の文章の（ ）に正しい言葉をいれなさい】

『光は波であつて（ ）である』

姫路瑞希・渡辺直貴の答え

『粒子』

教師のコメント
よくできました。

この「ひる渡辺くんの真面目な解答を見ると、なぜか西崎さんの真面目な解答が見られないのですが……、どうしてなのでしょうか？」

直貴のコメント
さあ？

土屋康太の答え

『寄せては返すの』

教師のコメント

君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え

『悪者の武器』

教師のコメント

先生もRPGはすきです。

金沢豊の答え

『希望』

教師のコメント

正解ではないですが、先生はこの解答はすきです

西崎瑠美の答え

『ストロボナイツ』

教師のコメント

誰も初○三〇の歌を答えなさいとはいってません

そういうえば今思い出しましたが、西崎さんは物理が苦手でしたね。

Side 明久

「吉井！木下たちがDクラスの連中と渡り廊下で交戦状態に入ったわよ！」

ポニーテールを揺らしながら駆けてきたのは同じ部隊に配属された島田さん。こうして改めてみると、背は高くて脚も綺麗なのに、どこか女性としての魅力に欠ける。一体何が足りないんだろう。

「ああ、胸か

「アンタの指を折るわ。小指から順に、全部綺麗に」

ヤバイ。何か作動したっぽい。

「そ、それよりホラ、試戦に集中しないと…」

「それもそうね」

ちなみに今はどんな感じかな?
耳をすませると……、

『さあ来い！この負け犬が！』

『て、鉄人！？い、嫌だ！補習室は嫌だああ…！』

『黙れ！捕虜は全員この戦闘が終わるまで補習室で特別講義だ！終

戦まで何時間かかるかわからんが、たっぷりと指導してやるからな』

『た、頼む！見逃してくれ！あんな拷問耐えきれる気がしない！』

『拷問？そんなことはしない。これは立派な教育だ。補習が終わる

頃には趣味が勉強、尊敬するのは一富金次郎、といった理想的な生

徒に仕立てあげてやるufs』

『お、鬼だ！誰か、助けつ
ガチャ）』

イヤアアア

（バタン、

よし、試戦の雰囲気はだいたいわかつた。

「島田さん、中堅部隊全員に通達」

「ん、なに？作戦？何て伝えんの？」

「総員退避！…！」

「この意気地無し…！」

ギヤアアアアア…！！！

殴られたあああ…！！！しかもチョキでえええ…！！！

「目が、目があつ…！」

「目をさましなさい、このバカ！アンタは部隊長でしょう…臆病風
に吹かれてどうするのよ…」

「やついた台詞は、せめてグーカパーで殴つたあとに言つて……！」

「いい、吉井？ウチラの役割は木下の前線部隊の援護でしよう？ア
イチラが戦闘で消耗した点数を補給する間、ウチラが前線を維持す
る。その重要な役割を担つてゐるウチラが逃げ出したりしたら、ア
イチラは補給ができないぢやない！」

「島田さん……君はなんて男らしいんだ……なぜだか涙が止まらない
いよ……（後、激痛も）」

「ウチは女よ……！」

「さあ、島田さん……やるが……！」

「無視するな吉井……！」

すると、島田さんのところに報告係がやつてきた。

「島田、前線部隊が後退を開始したぞ……」

「総員退避よ」

「島田さん……やつあと言つてゐることが全然違つよ……！」

「ウチラにはもう無理なのよ。でも、精一杯努力はしたから平氣よ
「よし、分かつた。逃げよう。僕らには荷が重すぎた」

くるりとFクラスに向かつて方向転換。

すると、本陣（Fクラス）に配置されてゐるはずのクラスメイトがいた。

えつと、確か横田くんだけ？

「ん？横田じゃない。どうしたの？」

「代表より伝令があります」

そうじつて横田くんは、メモを広げて「」と書つた。

「『逃げたら「ロス』』

「全員突撃しろお—————つ—————！」

「ちよつ、吉井！？」

すまない島田さん。

殺されるのは嫌なんだ！！！

すると、前方からこちらに美少女（秀吉）が走ってきた。

「明久！……いま、お主美少女とかいてワシと見たじやろ…………」

「何をいつているのを秀吉！……それは作者の仕業だよ…………とりあえず、秀吉自身は大丈夫なの？」「くつ…………、なんかスッキリしないがまよい。戦死は免れておるが、点数はかなり厳しいところまで削られてしまつたわい。召喚獣もヘロヘロじや」

「そつか。それなら早く戻つてテストを受け直してこないと」

「それもそうじやな。では、1、2教科ぐらいはうけてくるよ！」

「任せて！……」

そして秀吉は回復試験をつけにいった。

秀吉と入れ違いに、島田さんがこちらに来た。

「吉井！……試験召喚戦争のルールは覚えてる！？立会いの先生がいなくちゃ、召喚獣を呼び出すことはできないんだからね！……」

「分かってるよ！……」

「ホントに！？アンタのことだから忘れてると思つたわ！……」

なんと失礼な！……

僕だつてそれぐらい分かってるよ！……え？

それなら試験召喚戦争のルールを全て言えって？

それは作者が書くのめんどくせこりじこから、詳しへは『バカとテ
ストと召喚獣』を呼んで……

「吉井……見て……」

島田さんが描を描した方を見る。

「五十嵐先生に布施先生……ロクラスの奴ら、化学で勝負をして
くるきだな……！」

うへん。化学は自信ないんだよな。

「島田さん。化学の点数はどのくらい？」「
60点台が普通よ」

「よし。じゃああそは避けで学年主任の高橋先生のところへこ
さすがFクラス。ひどいなあ。まあ、僕が言つ台詞ではないんだけ
どね。」

「あ……そこにはもしゃFクラスの美波お姉さま……！布施
先生こひら来てください……！」

「げつ……！美春……！」

そして、僕たちはこそこそと氣づかれないようにその場を離れる。
なんか泥棒みたいだな。

「あ……そこにはもしゃFクラスの美波お姉さま……！布施
先生こひら来てください……！」

「しまつた……！布施先生がこひらに来る……！」

このままじゃ、一人とも補習室行きだ……！

仕方ない……！

「島田さん……」には君に任せて僕は先にいく……！

「ええ！？普通、逆でしょ！？」

「そんな台詞僕は知らない……！」

「えええ！？」

「じゃあ、後はよろしく……！」

島田さんが快く（？）承認してくれたので、僕はその場を離れる。

「吉井……後で殺してやる……！」

なんて事を言つんだ島田さん……！

君は本当に女なのか……！

「仕方ないわね……！美春……勝負よ……！」

「お姉さま……！美春の愛の一撃受け止めてください……！」

相手がどどどん島田さん近づいていく。

そして、

「試験召喚……！……！」

いよいよ、戦闘が始まつた……！

第五話 ロクラス戦 その2

バカテスト 化学

問 以下の問いに答えなさい

【ベンゼンの化学式を書きなさい】

姫路瑞希・金沢豊の答え

『C₆H₆』

教師の「メント
簡単でしたかね。

土屋康太の答え

『ベン+ゼン=ベンゼン』

教師の「メント

君は化学をなめていませんか。

吉井明久の答え

『B E N Z E N』

教師の「メント

あとで土屋くんと一緒に職員室に来るよつよ。

西崎瑠美の答え

『アンチクロロベンゼン』

渡辺直貴の答え

『パラジクロロベンゼン』

教師の「メント

なぜ、二人ともボーカ の鏡音 と レンの曲を書いているのですか？

まあ、確かにあの曲はとてもなくいいですが。

特に『この歌に意味はあるの？』の歌に意味はないよ。この歌に罪はあるの？この歌に罪はないよ。あの歌に意味はあるの？あの歌に意味はないよ。あの歌に罪はあるの？あの歌の罪は……』と、『ベンゼンに意味はあるの？ベンゼンに意味はないよ。ベンゼンに罪はあるの？』この歌の意味は……ベンゼン』といつ歌詞はいいですね。

西崎瑠美・渡辺直貴の「メント

なんで、先生がそんなにしつてんですか！？

Side 明久

「 試験召喚！――！」

呼び声に応えて、二人の足元に幾何学的な魔方陣が現れる。

教師の立会いの下にシステムが起動した証だ。そして、姿を見せる召喚獣。

島田さんの召喚獣は、軍服姿で手にサーべルを持っている。後は全て島田さんそっくり。ただし、身長は80センチ程度だ。

その姿を一言で表現するなら、『デフォルメされた島田美波』ってところ。

相手の方も同様にデフォルメされた自分の分身を従えている。向こうの獲物は普通の剣みたいだけど。

「お姉さまに捨てられて以来、美春はこの日を一日千秋の想いで待つていました……」

「ちょっと…いい加減ウチのことは諦めてよ。」

いよいよ戦闘が始まるんだな。そう思うと、自分のことじゃないのに全身に震えが走る。

「島田さん、お姉さまって

「嫌ですー！お姉さまはいつまでも美春のお姉さまなんですよー。」
「来なーーー！」一矢子は普通二郎が子をなの

「嘘ですーお姉さまは美春のことを愛しているはずですよー。」

「おなかがすいた」

ついていけないや。

「行きます！お姉さま！」

一人の召喚獣の距離が詰まる。いよいよ戦闘だ。

「はああああああっ…！」

「ああああああああ！」

それぞれの召喚獣が武器を構えて正面からぶつかり合い、力比べが始まった。

「一ノ二」

「負けません！！！」

島田さんじやなくて、瑠美だつたら一気に勝つな。これ。
そして、二人の召喚獣の頭上には参考として二人の戦闘力（点数）
が浮かび上がっていた。

Fクラス 島田美波 化学
53点

V S

Dクラス 清水美春 化学

94点

「島田さん！……サバ読んでたの！？本当は60点にすり届いてないじやん！……！」「数学以外は無理イ————！」「ここまでですっ！」「しまった！……！」

ついに、島田さんの召喚獣が清水さんの召喚獣に力負けした。そのままの勢いで島田さんの召喚獣が押し倒される。

「あ、お姉さま。勝負はつきましたね？」

刀を喉元に突きつけられる島田さんの召喚獣。これがやられたら即死だな。

「い、嫌あつ！補修室は嫌あつ！……！」

島田さんが取り乱す。僕も補修室は嫌だよ。

「補修室？…………フフッ」

清水さんが島田さんの手を引っ張る。

あれ？清水さん？そつちにあるのは保健室ですよ？

「ふふっ。お姉さま、この時間ならベッドは空いていますからね」「よ、吉井！早くフォローを！なんだか今のウチは補修室行きより危険な状況にいる気がするの！」

うん。僕から見てもそんな気がするよ。
でもね、島田さん…………

殺します……。美春とお姉さまの邪魔をする人は、全員殺します

「ごめん、僕にソコに飛び込む勇気はない。

「わしはまだ畠田ねえ……君のことは忘れない……」

「邪魔物は殺します！！！」

ヤバい！！！清水さんの召喚獣がこちらにやつて来た！！！
僕も補修室は嫌だ――――――――――――

「殺すことがでかぬなら、殺つてみりよ……。」「誰ですか！……！」

すると、僕の後ろからそんな声が聞こえた。

「え！？豊！？」

「ヒーローは遅れて参上つていうことだぜ！！！布施先生！！！Fクラス金沢豊、行きます！！！試験召喚！！！！！」

豊はすぐに、召喚を行い清水さんの召喚獣の前に立ちはだかつた。

「だ、誰ですかあなた！！見たことない人ですけど！！」

「俺は金沢豊！！そこにいる島田美波の…………」

その次の瞬間、豊はとんでもない爆弾発言をした。

「彼氏だ！――！」

ここにいる、全員の声が重なつた。ちなみに島田さんは顔を真つ赤にしている。

「なつー!?」んな男とお姉さまがー!? 許しませんーーー殺しますーーー！」

「やれるもんなら、やってみなーーー。ただし

そして、豊の点数が頭上に浮かび上がる。

Dクラス 清水美春
化学 41点

V
S

Fクラス 金沢豊

化学 441 点

またもや、全員の声が重なる。

「そ、そんなんつ！・！・！」

「ぶつ飛びな！――エクスプロードバレッジ――！」

ちなみに豊の召喚獣は、マントに袖無し Tシャツに半ズボンにサン
グラスに拳銃という装備。

で戦死になつた。

「これは、俺の召喚獣の特殊効果でな。俺がいつた技をだしてくれ
るんだぜ」

つ、強あざる……！

だつて、本当なら豊は回復試験を受けているはずなのに。

「さてと。おい、てつじ
連れていくてくれ！！」
西村先生！この負け犬を補修室に

案外、豊もひどい」と言つんだね。

「おお、清水か。たっぷりと勉強づけにしてやるぞ。」

合っているなんて！－いつか絶対、美春のものにしますからね！－

! ! !

清水さんは鉄人に補修室に連れていかれた。
さて、僕もやることが出来ちゃつたな。

「おい美波。大丈夫か?」

あこがれの豊かな心

「ツバシガ用又

「ん? 何かな豊

卷之三

「とほけるなよ
つて、危ねーーー！」

一 サー！！逃したか!!!!

レーベンハーフェンの本藏に現れるもの

77

『中華書局影印本』

「顔が見えねえけど、絶対真ん中にいるよ

續真猶子集

「まさか、てめえら、さつさの俺が言つたことを

「アーティストの心は、アーティストの心で描かれていた」と、アーティストの心がアーティストの心で描かれていた。

「いや、だつて……」

かいかい 作方ごんが腹のかい身不支がんが「開拓方々」に感

見ると、島田さんが豊に間接技を仕掛けていた。

「豊アアア――――――――――」

「ギヤアアアアアアアア――――――ギブキブ――――ギブ――――――」

――――――

「よくモ――――――」

「ギヤアアアアアアア――――――――――――――」

バタッ―――――― 豊が倒れたあと

…………。

よし。逃げよ。ひ。

「あ、そういえば吉井？」

「（ギクッ！）な、なにかな？し、島田さん

「ウチを見捨てたわね？」

「…………記憶にござれこません」

「…………」

「…………」

ものすいじへ島田さんから、殺氣がくる。しかも居心地が悪い。

早くここから抜け出したい。

しかも、なんか嫌な予感がするんだけど

「死になさい――吉井――試獣口

サモ

「誰かあああ――島田さんが錯乱した！本陣に連行してくれ――！」

――

嫌だああああ――――

今、補修室に連れていかれたら、清水さんの隣の席になっちゃうじやないかああ――――

「島田、落ち着け！……吉井隊長は味方だぞ……」

須川くんが、島田さんを羽交い締めにしている間、僕は倒れている豊のもとへ行く。

「豊？生きてる？」

「あ…………、なんとか…………」

なんとか、痛みをこらえて豊は立ち上がった。

「くつ……まだ生きていたのね豊……こいつなつたら吉井と一緒に殺してやる……！須川！！放しなさい……！」

「須川……早く連れていってくれ……！その禍々しい視線だけで殺されそうだ……！」

「ちよつと、放し殺してやるんだからあ…………つ…………！」

「…………」

物騒な捨て台詞を残し、島田さんは須川くんに本陣に連れていかれた。

「そういえば豊。なんで豊はここにいるの？」

「あ？ああ。あの木下とかいうやつに今の現状を聞いたんだ。そしたら、けつこう押されてると聞いてな。とりあえず先生に許可をもらい、三教科だけ受けこつちに来たんだ」

「ふ～ん」

でも、その三教科がフィールドに出でこなかつたらおしまいだよな。今のフィールドは化学。

ところが、豊は化学を受けたことになる。

残りの教科は何なんだろう?

「おーり。明久。ぼけつとしてないで片付けるぞ」

「あ、うん」

でも、豊がいれば安心だな。

「おっしゃあ……おもいつきつけられまくるぜ…………」

第五話 ロクラス戦 その2（後書き）

次回でロクラス戦完結です（できるといいな）。

第六話 ロクラス戦 その3（前書き）

今回、オリキヤラがでます。
やつひ、直貴達の召喚獣がだせた～（ホツ

第六話 Dクラス戦 その3

バカテスト 英語

問 以下の英文を訳しなさい

『This is the bookshelf that my grandmother had used regularly.』

姫路瑞希・西崎瑠美・金沢豊の答え

『これは私の祖母が愛用していた本棚です』

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。後、久しぶりに西崎さんの真面目な解答を見て先生はほっとしています。

土屋康太の答え

『これは

』

教師のコメント

訳せたのは『Thisだけですか。

吉井明久の答え

『 * × 』

教師のコメント

できれば地球上の言語で。

渡辺直貴の答え

『これは瑠美が壊していた本棚です』

教師のコメント

西崎さんほいつたい何をやらかしたのでしょうか？

S i d e 豊

「おっしゃあ、お前ら！！俺の他に後三人の優秀生徒が来るから、それまでに持ちこたえろ!!!!」

現在、俺が加わったため運はFクラスの方に向いている。
俺の登場で、Dクラスの奴らは『え？ 金沢豊なんてやついたつけ？』

まあ、全員補修室送りにしたが。

『Fクラスの方に、なんか知らない生徒がいるぞ！！』

『Dクラスが攻めてくるぞーー!』

「その勝負は俺が受けるぜ!!!! 金尺豊!!!! 」
サモン

! !

化学 Dクラス モブ男A 90点

Dクラス モブ男B
化学 95点

Dクラス 女子A
化学 104点

Dクラス 女子B
化学 102点

V S

Fクラス 金沢豊
化学 438点

「弱いぜ！－ブレイズバレット！－！」

俺の召喚獣が拳銃を持ちながら、敵四体の真下に炎の火柱を出した。
四体全員直撃したため戦死。

補修室で頑張つて勉強してこい－－－！

「さあ、次は誰だ－－！」

『くそつ－－長谷川先生はまだか－－！』

『まだだ－－それまで持ちこたえてくれ－－！』

『さすがに無理だ－－！』

長谷川先生？

つて、なんの科目だつたけ？

「おい。明久、……つていねえ－－？」

あいつどうこつなんだよーー！

「吉井隊長なら、トイレ！－！とかいつてトイレに行つたぞ」
「何やつてんだあいつはああああああああ－！－！まあ、後でぶちの
めすか。おい須川。長谷川先生つてなんの科目だ？」
「長谷川先生？ 確か数学だつたな」

数学だと！？

『長谷川先生が来たぞ――――――!――!』

「トビイリの魔術を教わる」

11

いやつは撤収！！

よし!! 金沢!! ここは俺に任せろ!!

「長谷川先生！！Fクラス須川亮いきます！！！試験召喚！！！」

数学
89点

5

Dクラス

モブ男C

数学 105 点

Dクラス モブ男D

数学 110 点

全然駄目じやねえかよ！！

須川がどぎめをされそうになつたその時！！

なぜか、敵の後ろから明久の召喚獣が飛んできた。
もちろん、敵一体に直撃した。

数学 Fクラス
10点 須川亮

V
S

Dクラス モブ男C

数学 85 点

数学 Dクラス モブ男D 90点

「何をいいっているんだ明久！！！須川がピンチだつたからお前の召喚獣を投げ飛ばして、須川をピンチから救えたんじゃないか！！」「その割には投げ飛ばす瞬間、『死んでこい明久！！』と言つたのは僕の気のせいかな！？」

「豊！！！助けにきたぞ！！！」

「スルーされた！！！」

「直貴！？お前、回復試験を受けていたんじゃ！？」

「学園2位の実力をなめるなよ！！Fクラス渡辺直貴！！ここにいるDクラス生徒、全員に数学で勝負する！！！！試験召喚！！！」

Dクラス　ここにいる生徒
数学　　平均90×15

▼ S

Fクラス　渡辺直貴
数学　　482点

『な、なんだあの点数！？』

『渡辺直貴ですって！？』

『ちょっと待てよーー！なんで学園2位のやつがFクラスにいるんだよ！？』

『いくぜーーー！月破翔烈破！？！』

直貴の召喚獣が剣を降り下ろした瞬間、そこから衝撃波が出てきて敵を全て戦死にした。

「いっちょ、あがりーー！」

「直貴！…お前が来たということは姫路達も…？」

「いや！瑞希と瑠美はまだ回復試験を受けている…しかし、瑠美はもう少しで全教科終わるぞ…ああ見えて、学園1位の座を持っているからな…！」

「分かつた！…よし…お前ら逝くぜ…！」

『『『おおおおおおおおおおおおおおおおお…』』』

Side 瑠美

「高橋先生！…西崎瑠美、全教科終了しました…！」

「はい。西崎さんはもう戦争に参加しても大丈夫ですよ」

「ありがとうございます…！」

現在、やっと回復試験を終わらせた。

ちなみに、豊は化学と保健体育を受けて戦争に参加。直貴は現代国語以外全て受けて戦争に参加しにいった。

私と瑞希は全教科受けると言っていたので、遅く参加することになっていた。

「姫路瑞希！…終了しました…！」

「お疲れ様です。」これで姫路さんも戦争に参加しても大丈夫ですよ

「はい…！」

「瑞希…行ける？」

「はい…行きましょう瑠美ちゃん…！」

「OK…行くよ…！」

Dクラス代表…！

覚悟しなさい…！

姫路瑞希・西崎瑠美、Dクラスに移動開始！！

Side 明久

「くそつ！…いくらなんでも教師を交換しそぎだろ…！」

現在のフィールドは現代国語。

Dクラスが数学では勝てないと思いつき、現代国語にしたらしい。しかも、直貴と豊はどちらも現代国語を受けていなかつたらしく現在戦争に参加できない。

つまり、僕たちはピンチの状態だということだ。

「Dクラス！…荒恵里菜が現代国語で勝負します…試験召喚！」

「くそつ！…Fクラス田中がいく…試験召喚！」

90

Dクラス 荒恵里菜
現代国語 118点

V S

Fクラス 田中明
現代国語 67点

「Fクラス須川亮参戦します…試験召喚！」

「Dクラス初瀬川桃子も参戦します…試験召喚！」

Dクラス 荒恵里菜

現代国語 118点

Dクラス

現代国語

165

V
S

「クラス田中明
現代国語 67点

Fクラス
須川亮
現代国語
84点

「くそつ！！まだか！！！」

「ていうか、坂本達は！？」「いた！！雄一！！！」
「明久！！もう少し持ちこたえろ！！」

「そんなこと言われたつて……。」
『成化』二〇三は補修

「田中と須川がやらねたぞ――――――」

“����-�-����-�-�

「下校している生徒にうまく紛れ込め！――！」

後ろから雄一の声が聞こえる。
どうやら、もう放課後のようだ。

「おい。明久
「なに? 直貴」

「あれって、Dクラス代表じゃないか？」

直貴がDクラス本隊の一一番後ろを指さす。

見ると、下校している生徒に紛れているDクラス代表の平賀くんがいた。

よしつ……

「直貴……豊……瑠美と姫路さんが間に合わないなら、僕達で平賀くんを倒そう……」「でも、科目はどうするんだ？」

「大丈夫。布施先生……」つちに来てください……」

先ほどの戦いで、ちょうど近くにいた布施先生を呼んだ。現代国語が無理なら化学で勝負するよ……

「なるほどな。現国じやなく化学で勝負するところとか」「そういうこと……行こうつ……一人とも……」

「「おう……」

「明久達の力バーをしろ……」

雄一も気づいたらしく、みんなに僕達のサポートをするように呼びかけた。

「Dクラス突撃です……」

その声を聞いて、Dクラスの本隊の隊長、荒さんが突撃指令をだす。僕たちはそのすきに平賀くんのもとへと移動する。しかし、

「行かせはしないよ……Dクラス初瀬川桃子……試験召喚……」

サモン

いつの間にか僕達の前にいた初瀬川さんが行く手をはさんだ。

「明久達の邪魔をするではない！！木下秀吉！！試験召喚じや！！」

しかし、秀吉がそれを遮る。

「行くのじゃ明久！！！」

「ありがとう秀吉！！」

みんながサポートをしてくれているお陰で、平賀くんの近くに来た。よし！！気付いてない！！

「今だ！！布施先生！！Fクラス吉井明久が！！」

「Fクラス渡辺直貴が！！」

「Fクラス金沢豊が！！」

「「「Dクラス代表！！平賀源一に」「そうはいかない！！Dクラス玉野美紀！！試験召喚！！」なつ！？」

なんだと！？
近衛部隊！？

「いつとくけど、玉野だけではないぞ！！Dクラス渡辺佑樹！！試験召喚！！！」

「同じくDクラス！！南谷愛里！！試験召喚！！！」

Fクラス　　吉井明久
化学　　45点

Fクラス 渡辺直貴
化学 456点

Fクラス 金沢豊
化学 356点

V S

Dクラス 玉野美紀
化学 96点

Dクラス 渡辺佑樹
化学 410点

Dクラス 南谷愛里化学
みなみやあいり
化学 123点

って、ちょっとまってよー！

Dクラスなのに、一人だけAクラスレベルがいるよー？

ん？

渡辺？まさか！？

「くそつー！佑樹ー！やつぱり近接部隊にいたかー！」「

「化学を選んだのが間違いだつたね兄ちゃんー！ー！ー！

「兄ちゃんー！ー！」

僕と豊の声が重なる。

「ああ。そこにいる渡辺佑樹は俺の双子の弟だー！ー」「えええええー！ー？」

直貴つて、双子だつたの！？

そういうえば、雰囲気が何となく似てる！－！

しかも、直貴の弟だから兄が得意な科目は弟も得意なのか！－！

「残念だつたな！－！Fクラスの三人！－！」

「平賀くん！－！」「一瞬、Aクラスレベルが一人いるといつらは？」
は焦つたが、所詮はその程度だ！－！諦めな！－！」

「……確かに、今の状況では僕達は勝てない」

「ああ、だから。こいつらに託すしかないんだよな」

「後は頼んだぞ。姫路、西崎」

「－－－はつ？」「－－－」

一瞬、Dクラスの四人が『何を言つてゐるんだ』といつらは？』
う表情になる。

すると、平賀くんの後ろから我らが切り札、姫路さんと瑠美が現
れた。

「あ、どうも……」

「えへへ……」

「あれ？どうしたの姫路さんに西崎さん。Aクラスの人達はこゝを
通らないはずだけど……」

「あ、いえ。そうじやなくて……」

「あ～もうーーーめんどいなーーー瑞希いくよーーーFクラス西崎
瑠美ーーー！」

「え！？あ、Fクラス姫路瑞希が」

「「Dクラス代表！－！平賀源一に化学で勝負するよ（します）－－！－

！－－！」

「えつ？」

「試験召喚獣召喚！－！試獣召喚！－－－！」

「試獣召喚です！－－－！」

サモン

「えつ？あ、試験召喚……」

あわてて、平賀くんが召喚獣を召喚する。
無理もないよね……、だつてこの一人……

Fクラス 西崎瑠美

化学 518点

Fクラス 姫路瑞希

化学 316点

V S

Dクラス 平賀源一（代表）

化学 108点

どちらもAクラスレベルなんだから……（一人は学園1位の実力
だけど……）

「え、えつ？」

「う、ごめんなさい！！

「じゃあね 鷹爪猛獣撃！！！」

姫路さんの召喚獣は剣を降り下ろし攻撃して、最後は瑠美の召喚獣
が空中から蹴りを落として平賀くんの召喚獣を戦死させた。
そして

「戦争終結！！勝者はFクラスです！！」

布施先生の一言で、戦争はFクラスの勝利という結果になった。

第六話 ロクラス戦 その3（後書き）

誤字脱字があつたら言つてください。

後、今日でたオリキャラ達は他の部分でも活躍します（特に佑樹と
恵里菜と桃子は）

このオリキャラ達の紹介は、次回にやると思っています。
それとも、次回が終わつた後にしようかな？

第七話 僕と悪魔と生徒交換（前書き）

今回はバカテストはなしです。
あと、オリジナル要素がはいります。

第七話 僕と悪魔と生徒交換

Side 明久

Dクラス代表 平賀源一

討死

『つおおおおおおおおおお…』

その報せを聞いたFクラスの勝鬨とDクラスの悲鳴が混ざり、耳を
つんざくよつな音響が校舎内を駆け巡った。

「凄えよ…本当にDクラスに勝てるなんて…」

「これで畠や卓袱台ともおさらばだな！」

「ああ。アレはDクラスの連中のものになるからな」

「坂本雄一サマサマだな！」

「やつぱりアイツは凄い奴だつたんだな…！」

「坂本も凄いけど、金沢と渡辺と西崎さんと姫路さんも凄いぜ…！」

「金沢、渡辺、坂本万歳！！！」

「姫路さん愛してます！！」

「西崎さん結婚 ぐはつ！？」

「ルミヲタブラカスナ……」

やばっ…！

また、直貴が魔王化した…！

「兄ちやん…！」

しかし、そこで弟佑樹の妨害がはいる。

「ジャマヲスルナコウキ！！」

「あ、そんなこと言うんだ？ 分かった。兄ちゃんの秘密をみんなにバラ 「すんません……許して佑樹くん…………」 最初からそう言えればいいのに……。つてか抱きつくな——————！ 僕にそんな趣味はない——————！」

はつきり言つけど、もしかして佑樹つてどう？

「あー、まあ。なんだ。そう手放しで誉められると、なんつーかちなみに雄一は、頬をポリポリと搔きながら明後田の方向を見ていた。

照れているなんて意外だな。

「まさか、姫路さんと西崎さんと渡辺くんがFクラスだつたなんて……」

すると僕の後ろから声が聞こえてきた。

振り向くとそこにはコタコタと歩み寄る平賀くんの姿があった？

「あ、その、さつきはすいません……」

「謝る必要なんてないわよ瑞希。これも勝負だしね」

「西崎さんのいうとおりだ。とにかく、ルールに則つてクラスを明け渡そう。ただ、今日はこんな時間だから、作業は明日でいいか？」

これが、試召戦争で負けたクラスが受ける罰的なものだ。

負けたクラスは三ヶ月試召戦争を行使できない。

しかも、僕達のクラスに負けたため僕達の教室の設備と交換しなければならない。

ずっと、あの設備のままつて嫌だよね。

「もちろん明日で良いよね、雄一？」

「いや、その必要はない」

「え？ なんで？」

「Dクラスを奪う気はないからだ」

「で、でも……」

「おいおい明久。忘れたのか？俺達の目標がAクラスだといつ」と
「でもそれなら、なんで標的をAクラスにしないのさ。おかしいじ
やないか」

「少しば自分で考える。そんなんだから、お前は近所の中学生に『馬鹿なお兄ちゃん』なんて愛称をつけられるんだ」

「なっ！ そんな半端にリアルな嘘をつかないでよ……」

「違うぜ雄一」明久は近所の小学生に言われたんだ

「そうなのか？ 明久……」

「…………人違いです」

「「まさか…………本当に言われたことがあるのか…………？」」

「み、見ないで……そんな目で僕を見ないで……」

「ど、とにかくだな。Dクラスの設備には一切手を出すつもりはない。しかし、条件がある」

「条件？ どんなんだ？」

「条件は二つだ。一つめは、俺が指示を出したらい、窓のそとにあるアレを動かなくしてもらいたい」

雄一が指したのはDクラスの窓の外に設置されているエアコンの室外機。

でも、この室外機はDクラスの物じゃない。ちょっと貧しい普通の高校レベルの設備でしかないDクラスにエアコンなんて物はないん

だから。

「Bクラスの室外機か。まあ、設備を壊すんだから、当然教師にある程度睨まれる可能性もあるとは思うが、平氣だろ。んで、二つ目は？」

「話が早くて助かるな。二つ目の条件は生徒の交換だ」

「生徒の交換？」

「ああ。今から俺がDクラスにいるある四人を指名する。その四人は明日からFクラスとなる。そして、その四人がFクラスとなるため、こちらからも四人いってもらいたいところだが、人数の関係があるため、二人だけDクラスにいってもらひつ」

「まあ、いいだろ。それで、誰を選ぶんだ？」

「なに。もう決まってるさ。渡辺佑樹、荒恵里菜、初瀬川桃子、南谷愛里をFクラスに貰おう」

「分かつた。佑樹、荒さん、初瀬川さん、南谷さんは前へ」

「さて。明日からお前らはFクラスだが、なにか言いたいことはあるか？」

「特にないです。それに、Fクラスでも僕は平氣です」

「私も」

「同じく」

「全然大丈夫よ」

「よし。これからよろしく頼むぞ。んで、こちらからの二人は明日のお楽しみだ」

「分かつた。ちなみに、なんで室外機を壊すんだ？」

「次のBクラス戦の作戦に必要なんでな。タイミングについては、後日詳しく話す。今日はもういっていいぞ」

「ああ。ありがとう。お前らがAクラスに勝てるよう願つているよ」

「ははは。無理するなよ。勝てっこないと思つてているだろひつ？」

「それはそうだ。AクラスにFクラスが勝てるわけがない。ま、社交辞令だな。あ、後、うちのクラスの四人をよろしく頼むぞ」

そして、平賀くんは、じゃあ、とてあげて去つていつた。

「さて、お前ら……今日は僕苦労だった！明日は消費した点数の補給を行つから、今日のところは帰つてゆっくりと休んでくれ！」と、その前に。Dクラスからきた新しいメンバーの自己紹介でもしてもらうか。じゃあ、渡辺（弟）のほうからいくか

「分かりました。渡辺直貴の双子の弟、渡辺佑樹です。明日からよろしくお願ひします」

「ううしてみると、直貴より佑樹の方が礼儀正しいね。

「荒恵里菜です。秀吉くんと同じく演劇部に所属しています。よろしくお願ひします」「初瀬川桃子です。美術部に所属しています。明日からよろしくお願ひします」

「南谷愛里です。部活には入つていませんが、ピアノをやつています。よろしくお願ひしますね」

『おい。めっちゃ可愛い女子が三人入つてきたぞ』

『教室がまた華やかになつたな！』

『生徒交換なんて、坂本はほんとに凄いぜ！』

可愛い女子が三人も入つてきたので、Eクラスの男子どもは一斉に喜びあつた。

「よし。ちなみにDクラスへ行くのは柴崎と田中だ。なにか文句ある奴は、直貴がボコボコにするがあるか？」

『全然ないです！』

『じゃあ、解散！』

皆雑談を交えながら自分のクラスへと向かい始めた。

ちなみに、直貴と豊は佑樹と瑠美は女子三人と雑談している。

「雄一、直貴、豊。僕らも帰らつよ」

「そうだな」

「分かった。あ、佑樹も一緒に帰るからな」

「さつさと帰るか」

「あ、あのつ、坂本くん」

「ん?」

帰らうとじてこむといふを、姫路さんと呼び止められた（雄一が）。

「お、姫路。びうした？」

「実は、坂本くんに聞きたいことがあるんです」

「おう。分かった」

そういふたえると、雄一は姫路さんと一緒に僕から少し離れたといふで話を始めた。

「なに、はなしてんだらう？」

姫路さんは真剣に雄一の顔を見ていた。

凄く集中しているように見える。

ん? もしかして……僕は存在を認識されていない? まさか、眼中にないとか? ちくしょう! それだったら スカート捲り放題じゃないか!!

『チャンスだぜ明久。パパッと捲つちまえよ。あんな可愛いこのスカートの中なんて、そつそつ拌めるもんじゃねえぜ?』

はっ!? お前は僕のなかの悪魔! ? くそつ! 僕を悪の道に誘惑してきたな! 舐めるなよ! 僕の正義の心が負けるものか!

……。

あれ？ 天使は？ 僕のなかの天使は！？ ちょっと、出てきてよ！…！ ジェリヤ 僕には悪の心しかないみたいじゃないか！？

「ま、元々興味があつたが、きっかけはコイツがそんな相談をしてきたってことだ」

僕が自分と戦つていると、いつの間にか一人がこちらに歩いてきていた。

「あの、吉井くんがそんなことを言い出した理由って……」

どんどん、二人の会話は続いていく。

「さて。そう言えば、振り分け試験で何かあつたみたいだが、それと関係があるかもしれないな。バカにはバカなりに譲れないものがあつた、ってことだろ」

いつたい、なにを話しているんだろう。

まさか、愛の告白！？

姫路さんは雄二が好きだったの！？

そうなると、なんかショックだよ……。

胸のあたりがモヤモヤするや。

「おい明久？ 大丈夫か？」

「え？ あ、直貴。 大丈夫だよ」

「雄二たち、話が終わつたみたいだぜ。 帰ろつぜ」

「あ、うん。 そうだね」

「瑞希……帰るよ……」

「あ、瑠美ちゃん……ちょっと待つてくれませんか?」

「分かった。じゃあ、荒さん達と一緒に玄関でまつてくれるね……」

向ひつせひつて、帰るひじー。

「じゃ、俺達もこへか

「やうだな」

「姫路さん……また明日ね……」

「はー……また明日……」

やつぱり、まだモヤモヤが消えないや……。

もしかして、僕……

まあいつか、さあ帰るひつ。

ていうか、天使がでこな

『捲つてもこいんぢやない?』

遅いよ出でぐるの……僕のなかの天使……
しかも、肯定してるし……!

第七話 僕と悪魔と生徒交換（後書き）

次回はオリキキャラ紹介 part 2 です。

オリキヤラ紹介 part2 (前書き)

訂正番です

オリキャラ紹介 part2

渡辺 佑樹（わたなべゆうき）

身長 直貴より5?小さい

体重 直貴より5?痩せてる

見た目 テイルズオブエクシリアのジユード
髪の色、目の色は直貴と同じ

趣味 昼寝 機械いじり

特技 格闘技 陸上 料理

得意科目 化学 日本史 英語 家庭

苦手科目 数学 現代国語 古典

詳細 直貴の双子の弟で、Dクラスの生徒。
雄一の条件にのつとり、Fクラスの生徒となる。

直貴は剣道が得意だが、佑樹は柔道や空手が得意。
見た目はそんな似てないが、雰囲気は似ている。

例えば、得意科目がほぼ同じとか、行動が同じとか。
似てないところは、直貴は機械音痴なのに佑樹は機械いじりが好き
とか、直貴より佑樹の方が礼儀正しいとか。はつきりって、弟の
方が評判がいいかもしない。

ちなみに直貴に双子の弟がいると知っていたのは、瑠美だけである。
兄の鈍感さには呆れていて、いつか、瑠美と直貴をくつつけなくち
やと思っており、ちょくちょく瑠美にアドバイスしている。

本人いわく、『瑠美さんのような美人の女性をお姉さんと早く呼び
たいです!!』らしい。

得意科目のなかで、一番得意な化学はAクラス並の成績をもつ。しかし、学園2位の実力を持つ兄がいるお陰で、次第にすべて（現代国語以外）の科目がAクラス並の成績を持つようになる。苦手科目のなかで、一番苦手な教科は現代国語。
直貴の得意な科目であるため、直貴はめちゃくちゃ勉強をせているらしい。

召喚獣はテイルズオブエクシリアのジユードのミニ版。

格闘技をうまく使い、敵をノックダウンしていく。

瑠美とはちょっと違う技を使う。

腕輪は化学だけ使える。

色は黄緑

発動キー ワードは『ドラグーン』

消費点数は200点

発動した瞬間召喚獣が輝く竜となり、あたり一面大量の火の玉をばらまく。最後は光線のようなものを出してもとの姿に戻る。ちなみにこのときだけ、自分は竜から出る特殊な光で観察処分者となる。

荒 恵里菜（あらえりな）

身長 156?

体重 44?

胸はCカップ

見た目 鈴宮ハルヒに出てくるキヨンの妹

髪の色は青

目の色は緑

趣味 読書 音楽を聞く

特技 演劇

得意科目 現代国語 古典 英語

苦手科目 化学 数学 物理

詳細 演劇部に所属している、Dクラスの生徒。

佑樹と同じく、雄二の条件にのつとり、Fクラスの生徒となる。

演劇部に所属しており、秀吉とは知り合いである。そのため、秀吉に恋心をだいでいる。

見た目はキヨンの妹に似てるが、性格は心優しい少女。

困っている人はほつとけない。ちなみに、少々天然ボケのところがある。

得意科目の中で一番得意なのは現代国語。

後にAクラスレベルの成績になる予定。

苦手科目は化学。本人いわく『実験嫌い』という理由だけで苦手らしい。

過去に実験で失敗して大変なめにあつたとか。

召喚獣はロッドに白いロープにティアラという僧侶っぽい装備。ちなみに、恵里菜はのりきではないがたまに技名を言つている。

（なぜ、技名を言つて点数がひかれいかといふと、瑠美が学園長と無理矢理召喚獣の特殊効果としていたから。技名を言つのは人それぞれである）

腕輪は現代国語だけ使える。

色は赤。

発動キー ワードは『不死鳥

使うと現在の点数からいつきに1点になる。

自分の召喚獣が不死鳥となり、敵を一撃で戦死させる。

ちなみに、恵里菜がこの腕輪を使うのはAクラス戦以降なので、ま

だ使わない。

初瀬川 桃子 (はせがわももこ)

身長 156?

体重 45?

胸はCカップ

見た目 ポニー テールでピンク色の髪
垂れ目で、色は赤

趣味 読書 絵を描く

特技 特にないです b y桃子

得意科目 英語 現代国語 家庭

苦手科目 数学 化学 日本史 物理

詳細 美術部に所属しているDクラスの生徒。雄一の条件でFクラスの生徒となる。

絵を描くのが好きで、いつもスケッチブックを持ち歩いている。
若干ボケのところがある性格。デジッコでもあり、あらゆるところ
で転びまくる。

自分では気を付けているらしいが.....。

得意科目で一番得意なのは、英語。成績はBクラスレベル。

苦手科目のなかで一番苦手なのは、日本史。日本史だけはFクラス
レベルである。

召喚獣はスケッチブックにペンにベレー帽に学生服。
スケッチブックに書いた絵は本物となり攻撃する。

案外描くスピードは早い。
腕輪はなし。

南谷 愛里（みなみやあいり）

身長 158?

体重 絶対言わない！！b よ愛里

見た目 二つ結びをしていて黒髪。目の色は茶色。胸はCカップ

趣味 暇なときはいつもピアノを弾く

特技 ピアノ 作曲や作詞

得意科目 日本史 数学 物理 家庭

苦手科目 古典 現代国語 保健体育

詳細明るくリーダーシップをもつてDクラスの生徒。

雄一の条件にのつとり、Fクラスの生徒となる。

性格に会わないが、ピアノで有名。作詞、作曲もしたことがあり、そのピアノの実力はコンクールで最優秀賞をとるほど。

得意科目で一番得意なのは日本史。実力はBクラスレベルである。苦手科目のなかで一番苦手なのは保健体育。運動の方は得意なのだが、保健が苦手。

いわゆる、変態が苦手。

召喚獣はキーボードに音符の髪飾りに白のワンドピース。キーボードから音を出して攻撃する。

弾くはやさによって、召喚獣の動きが変わる。
腕輪はなし。

第八話 僕と恐怖とお弁当（前書き）

今回の内容は……………、タイトルを見ただけでわかりますよね？（笑）

第八話 僕と恐怖とお弁当

Side 瑞美

現在、瑞希の家にいます！！
なぜかつて？

瑞希が料理を教えてほしいと言ったから特訓中なんだよ。
んで、現在は瑞希がこれなら作れると言つたシュークリームを作つ
てもらつているのもちろん一人で。
え？

不安じやないのかつて？

そりゃあ

「あーこれを入れたら、もつと甘くなりそうです！！さっそく……
「ストップ！！瑞希！！それは、青酸カリ！！そんなのいたら、
私、死んじやうよ！！！ていうか、なんで青酸カリが置いてあるの
！？」わ、分かりました……」

めちゃくちゃ不安に決まつてるじゃああああああああああああん

！！！！！！

今の見た！？見たでしょ！？
あのこ、私のこと殺すき！？
ていうか、まじでなんで青酸カリが置いてあるの！？

で、数分後（

「できましたよ……瑠美ちゃん……」

ショークリームが完成した。
うん。見た目は悪くないね。

「じゃあ。いただきます」

「…………（ドキドキ）」

パクつ

「あ、意外においし 辛…？」

辛…！

な、なにこれ…？
な、なんでショーカリーはいいのにクリームは辛いの…？

「瑠美ちゃん…？大丈夫ですか…？はい、お水です…！」

「…………（ゴクゴクゴクゴク）」
瑞希。いつたい私になんの恨みが…？

「え…？私は別に瑠美ちゃんに恨みなんかないですよ…？」

じゃあ。なんでこんなに辛いのよ…………。

チラッと台所を見ると…………なぜか、使う必要が全くないタ
バス「がクリームを作るときの鍋の近くに置いてあつた…………。

……。

「これだああああああああああああああああああああ…？…？」

「え…？」

「瑞希…！…あんた、バーラエッセンスと間違えてタバスコいれたで
しょ…！」

「え!? 私、タバスコをいたんですか!?」

「だって、このクーラムめちゃくちゃ辛いんだもん！ 明らかに台所に置いてある、タバスコが原因だぞ！――

「そ、そんなーー。」「みんなさい瑠美ちゃんーー。」

「まつたく……。」こんな感じや、お廻のお弁当作れないじやない

卷之三

「やつぱ。私がいなぐわや、駄目だね……。さて、瑞希。明日みん

なに食べてもうまいよつ、もつ煮つあつ「あつ」

۲۹

え？ テリーは私に作らせてくれるんですか？」「

河原かな一人で作つて売つのか。もぢらん、やるやうな?

「……」

「じゃあ、メニューは」こんな感じで.....」

ワイワイガヤガヤ

一人で明日みんなに食べてもらひ、お弁当のメニューを考え、料理を作つて（途中、事件がおひつたけど）、それいに箱につめてその日は終了した。

でも、いのちをめぐらしく悔した。

あんなことを頼まなければど

次の日のお昼時間

「さて、昼飯でも食いにいくか」

「そうだね。今日こそ、おじいさんね」

「おじおい明久。なに学食に行こうとしてんだ?」

「え? 直貴は行かないの?」

「違う。そういう意味じゃない。今日は瑠美達がお弁当をつくりつけてくれたんだぞ」

「そういえば、そんな約束をしていたな」

「頑張つて一人で作つたんだからね」

「絶対おいしくできたはずです……」

「(だと、いいんだがな……)」

「どうした直貴? 顔が真っ青だぜ?」

「い、いや、なんでもない……」

「では、こんなところではなく屋上にいくとしようかの」

「それはいいな。じゃあ、みんな屋上に行つてくれ。俺は飲み物を

買いに行つてくる」

「あー、それならウチも行くわ……」

みんなと話していると、もとロクラスメンバー四人が二つちに来た。

「あれ? 兄ちゃん達、どこにいくの?」

「お、佑樹。そうだ。お前らも一緒に屋上に行かないか?」

「え? なん?」

「瑠美達がお弁当を作つてくれたんだ。一緒に食べないか?」

「ホント!? あ、でも、僕らのぶんつてあるの?」

「あ、その事なら大丈夫だよ。けつこう多田に作つてきたから、佑樹達のぶんもあるよ」

「それなら。平気だね」

「私も一緒に行きます」

「私も! …」

「あたしもいただこりうかな」

「じゃあ、けつこう多く飲み物を買つてしなべりやな
あ、それなら私も買いに行きます」

「あたしも」

「恩に着る。じゃ、明久達は最初に行つてくれ、ちやんと俺のぶ
んを残しとけよ」

「うん。分かったよ」

こつして、雄一、島田さん、荒さん、南谷さんは飲み物を買いに行
き。僕、直貴、豊、ムツツロー、秀吉、瑠美、姫路さん、佑樹、
初瀬川さんは先に屋上にいへことになつた。

屋上

「ああ。 わつそく食べようか!!」

「あ、そういうえばシートも持つてあるんです。今、ひきますね
「なんか、ピクニックみたいですね」

「天気もいいからね」

姫路さんがシートをひいてくれたので僕たちはそこに座つた。
真ん中には、本当に多田に作つたらしく、一段弁当が一つ置いてあ
つた（しかも、めつちや豪華なお弁当箱）。

「じゃあ。開けるね」

そう言つと、瑠美は一つのお弁当箱の蓋を開けた。
なかを見ると、

「ダラダラダラ」

「あ、明久？ よだれがす」「よ？」

「凄い…………。」

まず、片方のお弁当箱にはお稲荷さんとおじめうつ、主食類。もう片方には、卵焼きやタマセんウインナー、おひたしや、ミニパンバーグや、エビフライなどおかず類が揃っていた。しかも、きれいにつめてあるからめちゃくちゃ美味しい。

「な、なんだこのうまいそうな弁当は…………」

「やべえ…………、よだれがとまんねえ…………」

「…………（ダラダラダラ）」

「美味しそうじゃの～（キラキラ）」

「凄い！－！僕の好きなものがたくさんあるやーー！」

「佑樹くん。落ち着いて。」など、料理でも教えてもらひつかな？」

みんなも、認めるほど美味しいそうな弁当。

なんか、雄一達にちゃんと残しかなくなっちゃ悪いよね。ていうか、絶対右ストレートが飛んでくるな。

「さあ、食べようか」

「こいつただきまーす！－！（パクつ）」

「…………（パクつ）」

「あ、ずるこぞ土屋」

まず、田にも止まらぬ速さで初瀬川さんがお稲荷さんを、ムツツリ一一個エビフライを、豊が卵焼きを食べた。

「お、美味しい！－！」

「ホントですか！－！」

「良かつた～」

初瀬川さんは、美味しいとコメントを返したが、なぜか男子一人のコメントが返つてこない。
すると……、

ブルブルブルブル
倒れたまま体が震えてるおと

卷之三

なぜか、一人とも倒れて、小刻みに震えだした。
しかし、一人はすぐに起き上がりつて、

「（グッ）」

お、美味しいぞ。に、西崎、ひ、姫路。

ムツツリーは親指をたて、豊は美味しいと返してくれた。
それなのに、なぜ、一人とも震えているのかな？

「あ、お口に会いました？良かつたです」

（サヌニツ）

姫路さんは喜んでいたが、瑠美は顔を真っ青にしていた。

「（直貴、佑樹、秀吉。今のビーハ思ひ。）」

「（わしはなぜ、豊とムツツリーは倒れ、初瀬川が倒れていないのかと疑問がわいてくるのじや）

「（余分、うんよく初瀬川は瑠美の作ったものを食べられたんだろ
うな。…………よし、明久）」

「（なに直貴？）」

「（俺は主食しか食わない。おかげはお前に任せた）」

「（嫌だよ！……あんなの見せられると、めちゃくちゃ不安だよ！
！……）」

「（大丈夫だ。多分100%中25%は瑠美が作ったものだ。安心
しろ）」

「（そんなの安心できなによ！……！）」

「（それなら、わしがいこうかの）」

「（駄目だ木下！……）」

「（もう、その時点で信じられないよ！……）」

「（大丈夫じゃ。わしの鉄の胃袋を信じるんじや）」

「（いや、ここは明久に任せるんだ！……）」

「（直貴！……起きま、僕を死に追いやるつもりだな！……）」

まあ、そんなこんなで言い争つてこると、

「お~い。飲み物買つてきたぞ~」

「なんか、騒がしいですね」

「なにかあつたのかしら？」

雄二と荒さんと南谷さんが登場。
あれ？ 鳥田さんがない？

「お、うまいそうな弁当だな（パクつ）」
「あ、雄二くんずるいです。私も（パクつ）」
「二人ともずるいわよ。あたしも（パクつ）」
「「「「あつ…………」「」「」「」」

ヤバい……雄一はともかく、荒さんと南谷さんが食べたものは……

!!

「あ、とても美味しいです……」

「ほんと……とても美味しいわ……」

……あれ?

もしかして、二人は瑠美が作ったものを食べたのかな?

……ということは、

バタン!!!!

ガタガタブルブル

手遅れだつた。

「ちょ、坂本!?!? いつたいぢうしたのよ!?!?」

「こ」で島田さん登場。

ん?

視線が感じる。

チラッとみると、雄一が今言いたいことを田で僕に訴えていた。

「『毒をもつただろ』」

「『もつてないよ。これが姫路さんの実力だよ』」

「『じゃあ、なんで荒と南谷は倒れてないんだ?』」

「『あの一人はうんよく、瑠美が作ったものを食べたみたいだよ』」

普段、役にたたないのがここで役に立つなんて。

「あ、足がつってな……」

そして、雄一は瑠美と姫路さんを悲しませなこより（おも）姫路さんを）嘘をついた。

「あはは、ダッシュで階段のぼりおりしたからじゃないかな」

「なれど、アリサが

「 そ う な の ？ 坂 本 つ て こ れ 以 上 な い く ら い 鍛 え ら れ て る と 思 う な ど 」

事情のわかっていない島田さんが不思議そうな顔をする。

で主食を食べている。

「あー！なんか、主食もおかずも美味しいそうね！…ウチも食べるわ

え！？

「ほんとうにいいわ、」と、三つ子の娘が喜んで呟いた。

（現春が作る）力子の名食（かみぐい）

あれ？

おたもせ=ハ?

なんで女子ばつかし!?

「ほら。明久達もはやく食べなくちゃ、なくなるよ」

「アーリー・ハーヴィー（ハーヴィー・アーリー）」

「いやうでも食べられるよーー（ムシャムシャ）

「桃子ちゃん。食べながら喋らない（ムシャムシャ）

「そういう恵里菜も食べながら喋らない（ムシャムシャ）」

「變りやね（ムシャムシャ）」

「ていうか全員そうだろ（ムシャムシャ）」

一番、食いかたが汚いのは代表さんですね（ムジヤムジヤ）」

うむ。これは美味しいの~
(ムシャムシャ)

5
4
3

なんで、みんな平氣で食べてるの？

100% 中75% は姫路さんの料理ですよ？

「（もしかしたら、姫路の料理が途中からおいしくなつてゐんじやないか？）」

「え? 今?」

(琴美が言つたが、たゞ二万で作つたので、

「あ。そういうばーテガートもあるんですね！」

デザート!?

主食とおかずだけではなく、デザートも！？

九月三十日

「二人とも料理が上手一のふ

元とモルモット三三のれ

違つよ南谷さん。

姫路さんは凶器を作るのが上手いんだよ。

「あれ？ 7個しかありません。どうしましょ？」

「…………

い、嫌な予感が……

「ちょうど、男子が7人いるから男子に食べてもらおうか」

「…………なんだとおおおおおおお…………」「…………」

「…………」

「え～。私たちのぶんは～？」

「また、こんどね」

「仕方ありませんね」

「そうね」

「いいわね～。吉井達は」

全然よくないよ…………

「はい……どうぞ～！ 明久くん～！」

すると、姫路さんににかを渡された。てをみると、カップゼリーみたいなものが僕の手のひらに置かれていた。

スプーンつき。

他のメンバーもそんな状態だった。

「あ、ありがとうございます姫路さん…………」

「どうする…？」

「（ゆ、雄一）（ひよじよつ）」

「（じょづがねえ。死を覚悟して食べるぞ）」

「（めわやくわや不安なのじやが……）」

「（クククク）」

「（俺はまだ死にたくない……）」

「（運命といつものは残酷ですね……）」

「（よし。みんなで一斉に食べやつ）」

豊の発言に全員つなづいた。

「こ、べ、モ……セーの……！」

「「「「「（パクつ……マシヤマシヤ）」」」」」

.....。

「「「「「「（マキナリ……）」」」」」」

べ、ま、つ、一、?

「「「「「（マキナリ……）」」」」」」

全員、食べた五秒後に命といつ夢い花が散つた。

第八話 僕と恐怖とお弁当（後書き）

誤字脱字があつたら言つてください

次回はもしかしたら、オリ展開が入ります

第九話 狹いと目的と宣戦布告

バカテスト 保健体育

第7問

問 以下の問いに答えなさい。

【女性は（ ）を迎えることで第一次成長期になり、特有の体つきになり始める】

姫路瑞希の答え

『初潮』

教師のコメント
正解です。

吉井明久・渡辺佑樹の答え

『明日』

教師のコメント

随分と急な話ですね。

土屋康太・金沢豊・渡辺直貴の答え

『初潮と呼ばれる。生まれて初めての生理。医学用語では、生理のことを見経、初潮のことを初経という。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が43?に達するころに初潮を見るものが多いため、その訪れる年齢には個人差がある。日本では平均十一歳。また、体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境、栄養状態などに影響される』

教師の「メント
詳しそぎです。
しかも、渡辺（兄）くんが変態になると西崎さんが悲しむと思いま
すよ。

瑠美の「メント
直貴の変態.....。

南谷愛里の答え

『初潮（いじの問題をつべつた教師は辞任して下さい）』

教師の「メント

しつかりと正解を書いてからその事を書いてても、効果はないですよ。

西崎瑠美の答え

『「ブシュー（／＼／＼／＼） 顔を真っ赤にしながら氣絶』

教師の「メント

西崎さん！？

大丈夫ですか！？

Side 瑠美

現在、復活した皆とお茶中です。

特に男子メンバー全員には、大量にお茶を飲ませています。

お茶には殺菌成分が含まれているので
てこうか、なんであの時瑞希におかずを作らせむやつたんだね！？

— 9 —

あ、もう！！！私のバカー！！！！

美波「そういえば坂本、次の目標だけど」

雄一「ん？ 試召戦争のか？」

美波「うん。相手はCクラスなんだって?」

雄一「ああ。そうだ」

明久「え？ Bクラスや、Aクラスとはやらないの？」

雄一「いや。Cクラスの後にBクラスとやる」

豊「Aクラスとは?」

雄一「まあ落ち着け。作戦はちゃんとあるんだ」

全員「作戦？」

雄一 ああ。まず、今の実力ではAクラスには勝てない

珍しい……、雄一がそんなことを言うなんて

文月学園はAからFの六クラスから成るけど、Aクラスは格が違う。別次元だと言つてもいいらしい。

五十人のAクラスの生徒のうち、四十人はまだいいみたい。せいぜいBクラスよりも少々点数が上の普通の生徒らしいの。でも、残り十人がヤバいみたい。ちなみに、なぜか私と直貴はもつ

とヤバいとか言われてるのよね。

まあ、今はAクラスじゃなくてFクラスだからそんなことどうだつていいくけど（～）

直貴「じゃあ、Aクラスとはやうないのか？」

雄一「もちろんやるや。一騎討ちでな

全員「一騎討ち?」

またもや皆と声が重なる。
このクラスってよく声が重なるよね。

恵里菜「でも、どうやって一騎討ちに持ち込むんですか？」

雄一「Bクラスを使つ」

佑樹「使つ? Bクラスをどうやって使つんですか?」

雄一「明久。試召戦争で下位クラスが負けた場合の設備はどうなるか知つていろな?」

明久「え? も、もちろん!（知らないよ…………）」

あの明久の顔…………、絶対知らないな。

瑞希「（吉井君、下位クラスは負けたら設備のランクを一つ落とされるんですよ）」

あ、瑞希の助け舟が入った。

今の明久の顔は、なるほどと思つてゐる顔になつた。

明久「設備のランクを落とされるんだよ」

雄二「…………まあいい。つまり、BクラスならCクラスの設備に落とされるわけだ」

明久「そうだね。常識だね」

その常識を、あんたは知らなかつたんだよ明久。

雄二「では、上位クラスが負けた場合は？」

明久「悔しい」

雄二「ムツツリー、ベンチ」

明久「ややつ。僕を爪切り要らずの身体にする動きがつ」

直貴「馬鹿がお前は。後、ムツツリーは本当にベンチを用意するんじやない」

ここに直貴がツツコミを入れた。

てこづか、ムツツリーはどこからベンチを取り出したの？

瑞希「相手クラスと設備が入れ替えられちやうんですよ

またもや瑞希のフォローが入る。

瑞希はいい子だね。

明久「つまり、うちに負けたクラスは最低の設備と入れ替えられるわけだね」

雄一「ああ、そのシステムを利用して、Dクラスとも交渉したんだ」

愛里「じゃあ、あたし達と同じように、Bクラスから何人かFクラスの生徒と交換するき？」

雄一「いや、残念ながら、生徒交換は禁止されたんだ」

瑠美「さすがにそれはダメだ。と言われてね。これから生徒交換はダメになってしまったの」

雄一「だから、Bクラスには違う交渉をする。設備を入れ替えない代わりにAクラスへと攻め込むよう交渉する。設備を入れ替えたらFクラスだが、Aクラスに負けるだけならCクラス設備で済むからな。まずうまくいくだろう」

明久「ふんふん。それで？」

雄一「それをネタにAクラスと交渉する。『Bクラスとの勝負直後に攻め込むぞ』といった具合にな」

明久「なるほどね」

秀吉「じゃが、それでも問題はあるじゃらう。体力としては辛いし面倒じゃが、Aクラスとしては一騎討ちよりも試合戦争の方が確実であるのさ確かじゃからな。それに」

明久「それに？」

秀吉「そもそも一騎討ちで勝てるのじゃ んつか？」さういひ姫路、渡辺（兄）、西崎がいふとこ「」とは既にしれわたつてこむ「」とじやる「」。

言われてみればそうだね。

FクラスがDクラスに勝つたとなると、当然その勝ち方に注目が集まる。私達の存在はもはや周知の事実だらう。そうなると相手も私達に対してなんらかの対策を練つてゐるはず。

雄一「そのへんに關しては考へがある。心配するな。あと、もしかしたら一騎討ちでやるやつと、一體一でやるやつに別れる。一騎討ちでやるやつ、一體一の方がすぐ終わるはずだからな」

皆の不安とは対照的に自信満々な雄一。

豊「そういうえばBクラスの前に倒す、Cクラスの」となんだが。 やるといひ」とは何か理由があるのか？」

雄一「ああ。実はCクラスとやるとこ「」のは、初瀬川から頼まれたんだ」

（回想）

桃子「あの坂本くん……。ちよつといいですか？」

雄一「なんだ初瀬川？もつ、Fクラスは嫌か？」

桃子「い、いえ……そんな」とではないんです」

雄一「じゃあなんだ?」

桃子「あの……、次の目標ってBクラスなんですか?」

雄一「ああ。 そりだが?」

桃子「…………お願いがあるんです。 Bクラスより前にCクラスとやつてくれませんか?」

雄一「Cクラスと? 何故だ?」

桃子「実は…………」

内緒話中…………

雄一「なるほどな…………。 そういうえば、学園でそんなことが噂されてたな」

桃子「あれば、噂ではありません。 本当のことです」

雄一「別にやつてもいいが。 お前は覚悟を決めているのか?」

桃子「もちろん決めています。 他の教科は微妙ですが、得意の英語で勝負を申し込めば勝てます。 それに、意外に私、召喚獣の操作は上手いんですよ?」

雄一「そういうえば、お前の得意教科は英語だつて聞いたな」

桃子「英語もそうですが、国語も得意です」

雄二「なるほどな。だが、万が一の為に、一人助つ人を用意しつけ」

桃子「助つ人？」

雄二「ああ。万が一の為にだがな」

桃子「分かりました。皆さんもあとで伝えとかなくちゃいきませんね」

雄二「そうだな」

（回想終了）

雄二「と。これがCクラスとやる理由だ」
ふうん。

桃子がCクラスとやりたいって言うなんて意外だね。あの子。大人しいから、あまり戦争が苦手そつだなって思っていたんだけど、やるときはやるみたいね。

それにしても、桃子つてCクラスとなんかあつたのかな？まあ一年のころ、誰もが驚く噂が流れていたのは覚えてるけど、内容までは覚えてないや。

桃子「で。私が一応Cクラス代表を倒すという予定なんですけど、一人だけでは戦うと危険だからもう一人連れていけって言われてるんです。そこで…………瑠美ちゃん。一緒に戦ってくれませんか？」

瑠美「うん。別にいいよ」

全員「軽つ！！！」

だつて、はつきりいつてじクラス代表つて嫌いなんだよね~。
ああいう性格めっちゃ無理!!!!
あれ、男を見る目ないよね。

桃子「あ、ありがとひざわいます!!!!」

瑠美「ちなみに、教科はなにでいくつもりなの?」

桃子「あ、はい。英語か国語です」

瑠美「英語でいってくれるよね?」

桃子「え?あ、あの『英語でいってくれるよね?』
は、はい.....」

瑠美「じゃあ、英語で頑張るつー!!!!」

全員「(なに今の脅し!?)背中に魔神が見えた!!!!」

直貴「(やつこ)や。瑠美は国語が苦手だつたけ)」

国語で勝負なんか、お・こ・と・わ・り!!!!

雄一「じゃあ、助つ人も決まつたことだし。早速、じクラスに宣戦布告をしてこい明久!!!!!!」

明久「絶対嫌だ!!!!!!」

佑樹「あ、じゃあ。僕もついていきます!!!!」

雄二「渡辺（弟）か。まあ、いいだろう。一人揃つて逝つてこい！
！！！」

佑樹「じゃあ。明久さん。行きましょう！！」

雄二「ちなみに、今日の午後に開戦と行つてこいよ」

明久「分かつた」

数分後

明久達が戻ってきたけど、二人とも無事であった。
襲いかかってきたから、佑樹がボコボコにしてきたらしい。

佑樹「久しぶりに暴れましたね」

このセリフが聞こえてきたけど、あえてスルーしよう。うん。

第九話 狹いと目的と宣戦布告（後書き）

次回はCクラス戦です！！

第十話 Cクラス戦 その1（前書き）

Cクラス戦です

第十話 Cクラス戦 その1

バカテスト 生物

第八問

問 以下の問いに答えなさい

【人が生きていく上で必要となる五大栄養素を全て書きなさい】

姫路瑞希・西崎瑠美・渡辺直貴の答え

『?脂質 ?炭水化物 ?タンパク質 ?ビタミン ?ミネラル』

教師のコメント

流石です。久しぶりに学園1位と2位の正解を安心しました。

吉井明久の答え

『?砂糖 ?塩 ?水道水 ?雨水 ?湧き水』

教師のコメント

それで生きていけるのは君だけです。

金沢豊の答え

『?カモミール ?レモングラス ?ペパーミント ?ハイビスカス ?ローズヒップ』

教師のコメント

それはハーブティーを作るときに使う有名なハーブです。

土屋康太の答え

『初潮年齢が十歳未満の時は早発月経とちがう。また、十五歳になつても初潮がないときを遅発月経、さらに十八歳になつても初潮がないときを原発性無月経といふ』

教師のコメント

保健体育のテストは一時間前に終わりました。

Side 明久

キーンコーンカーンコーン

雄一「開戦だ!!!!!!野郎共…きつちつ死んで!!」

Fクラス半分『おお-----』

ビビビビビビビ

午後一時丁度。

Fクラスの半分の人達が、Cクラスに向かつていつた。残つてるのはその半分と、僕、姫路さん、雄一、秀吉、ムツツリー、瑠美、直貴、佑樹、荒さん、初瀬川さん、南谷さんだ。ちなみに、さつきCクラスに向かつていつたメンバーの中には、豊と島田さんがいる。

雄一「残りのメンバーは突撃礼が出てくるまで、点数を補充しつけ

!』

残りのメンバー『了解!!!!』

さて、まずCクラスを倒すための作戦を紹介してくよ。

最初は、半分のメンバー（豊と島田さんをいれた）がCクラスに向かう。

この時は長谷川先生を使い、豊と島田さんの得意な数学で勝負する。もし、数学ではなくなつてしまつたら島田さんは補充をしに来る。代わりに豊がそこで勝負する。

戦力が削られていつたら、次の部隊が出陣。

この時は、荒さんと秀吉、姫路さん、僕、直貴、佑樹、瑠美、初瀬川さんもついていく。

ムツツリーニと南谷さんは雄一の護衛。

メインのメンバーで、Cクラスの戦力を削つていき、目を見計らつて瑠美と初瀬川さんはCクラス代表、小山友香さんのもとへいく。このときは英語担当、遠藤先生も連れていく。そして一気に一人でCクラス代表の首をとる。だが、この時、Cクラスに要注意人物がいる。

一人目は佐々木隆と佐々木光という佐々木兄弟。

まあ、双子なんだけどね。

コンビネーションもばっちりらしく、一人とも英語が得意らしい。

英語が苦手な直貴を狙つてくる可能性が高いので充分注意すること。

二人目は五十嵐享弥。

数学が得意で最初の部隊にいる可能性が高い。点数も高いので気を付けること。

三人目は林舞衣。

化学が得意で同じく最初の部隊にいる可能性が高い。

数学から化学に変わつた時は気を付けること。

四人目は藤崎紗那。

英語が得意なので、小山友香の護衛につくか、最初の部隊にいるかは分からない。

英語が苦手な人達は気を付けること。

そういえば、この藤崎紗那とかいう人。

なんか、今回初瀬川さんがCクラスとやりたいとかいつた理由のキーワード人物みたいなんだ。

深い理由は分からぬけどね。

雄二「おい明久。お前も点数を補充しどけ。後で大変な目にあうぞ」

明久「うん。分かったよ」

とりあえず、最初の部隊は僕達が有利になるように頑張ってほしにな。

S i d e 豊

美波「Fクラス！島田美波いきます！！試験召喚！」

『Fクラス 島田美波
数学 198点

VS

Cクラス モブ男A

数学	97点
&	
Cクラス	モブ男B
数学	108点
『	』
モブ男A	「一人Bクラス並の点数だぞーーー！」
モブ男B	「そいつは構うなーー他の連中を狙えーーー！」
？？？	「チャージバレットーーー！」
バン	「バン！バン！バン！」
二人	「え？」
『	』
『Fクラス	金沢豊
数学	398点
V	S
Cクラス	モブ男A
数学	0点
&	
Cクラス	モブ男B
数学	0点
『	』
豊	「相手は一人じゃないということに気づくんだなーーー！」

モブ男C「え、Aクラス並みだと！？」

女A「勝てるわけないじゃない！」

美波一今よ！！総員突撃！！

数学
Fクラス
島田美波
198点

数学 日々学習 398点 金沢豊

Fクラスメンバー

数学
平均50点
 $\times 12$

V
S

Cクラスメンバー

数学
平均98点×20

2

圧倒的に向こうの方が人数が多いが、これぐらいなら楽勝だ！！！

豊「いつくぜーーー！エクスプレードバレットーーー！」

美波「はああああああーー！」

Fクラスメンバー

数学 E クラス 金沢 豊 388 点

エラス

Fクラスメンバー

数学

平均45点×12

V
S

Cクラスメンバー

数学
0点×20

おつしあせん！――！

擊破た ！！！

豊「今のうちに前進だ！！」

男D 「Fクラスが来たぞ！！」

？？？ 「足止めしろ！..絶対にFクラスに近づきたせんなーーー！」

Cクラス近くで、12人ぐらいの人数のFクラスの生徒達がいる。
今、指示をだしたのは部隊長だろう。

男D 「Fクラス覚悟！..！」

男子 × 11人
「 「 「 「 試験召喚！..！」」」

女子 × 9人
「 「 「 「 試験召喚！..！」」」

ちなみに、長谷川先生もついてきているので召喚フィールドからは
俺たちはでない。
さあ、こいつらはどうだ？

『Fクラス 金沢豊

数学 388点

Fクラス 島田美波

数学 188点

Fクラスメンバー

数学 平均45点 × 12

V S

Cクラス男子

数学 平均108点 × 11

Cクラス女子

数学 平均100点 × 9

点数は高いが、 いける!!

豊「ここは俺に任せろ!! フリーズバレット!!」

男子 × 11 『!?!』

女B「う、 動けない!!?」

女C「腕輪を持つてないのになんで!!?」

フリーズバレットは、 敵を凍らせることができるんだ。
でも、 こういう効果の技は、 五点されんだよな。

豊「美波は女子を頼む!!」

美波「分かったわ!!!!」

豊「ツインバレット!!!!」

美波「とどめええええ!!!!」

俺と美波で敵に止めをさしていく。

そして、残りは男子一人、女子一人という男女が残された。
そういうえば、この二人だけ俺たちと戦わなかつたな。
まあ、面倒なことになる前に片付けるか。

豊「さて、この二人を倒したらFクラスへ戻るとするか」

美波「代表を倒すのは、ウチらの役目じゃないしね」

豊「ああ。早く召喚しな！」

？？？「舞衣…………。布施先生はまだか？」

？？？「まだですね

あっ！－！来ました！－！布施先生！－！こちらへ来てください－－！」

なに！？

すると、俺たちの後ろから化学担当の布施先生がきた。
まさかこいつら、雄一が言つてた！－！

享弥「おっしゃあいぐぜ！－！長谷川先生！－！Cクラス五十嵐享弥
きます！－！試験召喚！－！」

舞衣「長谷川先生！－！五十嵐くんが終わつたら、化学で勝負をさせ
てください！－！」

『Cクラス 五十嵐享弥
数学 321点

「クラス全員「「「「な！？」」」」

美波「え、Aクラス並みの成績！？」

「！？雄一が言っていた要注意人物じゃねえか！」

享弥「お前らがいく場所は補習室だ！！！！ビリヤああああああ

相手の召喚獣が俺と美波を通りすぎ、後ろにいたFクラスメンバーを一撃で倒していった。

鉄人一 戦死者は補習室に集合――――――――――――

ここで登場鉄人。

କବିତା

舞衣一
布施先生！！召喚証印を！！

「布施一承認します」

舞衣「さあ。こつからは化学で勝負です！！林舞衣。試験召喚です

『Cクラス』
林舞衣
258点

数学フィールドから化学フィールドに変わった。

林舞衣。こいつも雄一が言つていた要注意人物だ。ちなみに五十嵐享弥は、召喚をしていない。
くそつー！

こつからは明久達が来るまで足止めだーー！

美波「豊ーーあれつてCクラスの代表じゃないーー？」

先を見ると、Cクラス代表が屋上へと続く階段を登つていぐ姿が見えた。

ここでは危険だから、屋上へと逃げるきかーー！

豊「美波ーーお前はFクラスに戻つて、雄一に伝えてこいーー現在、Cクラス代表が屋上へと逃げたとーーー後、明久達も出陣と頼んできてくれーーー！」

美波「分かつたわーーそれまで持ちこたえていなさいよーーー！」

豊「任せろーーー！」

そう言つて、美波はFクラスに戻つていった。

豊「さあ、いくかーー金沢豊いくぜーー試験召喚ーーー！」

『Fクラス 金沢豊
化学 498点』

舞衣「なつーー？」

豊「残念だったな。俺も化学が得意なんだよーーー！」

享弥「（ここ）。こんな点数をとつて、なんであつた代表のところにいかなかつたんだ？」「こつら、一体何をたくらんでいる！？」化学の点数があるやつは、舞衣の手助けをしろ！……」

「クラス10人くらい
試験召喚！」

『Cクラス10人
平均108点×10』

— १८ —

第十話 Cクラス戦 その1（後書き）

次回もオリキヤラが登場します。

誤字脱字があつたら言つてください。

第十一話 Cクラス戦 その2（前書き）

今回、桃子がCクラスとやると言つた理由のキーワード人物がでてきます。

第十一話 Cクラス戦 その2

Side 明久

美波「坂本！－！」

ガラツ－！

ドアを見ると、全速力で走ってきたのか、息切れの島田さんがいた。

雄一「どうした？何があつたか？」

美波「大変よ！－！Cクラス代表が屋上へと逃げたわ！－！」

雄一「なんだと！？」

美波「後、五十嵐享弥が出てきてウチと豊以外を全滅させたの。今は数学から化学になつて、林舞衣と豊が対戦してるわ！－！」

雄一「やっぱし、五十嵐享弥と林舞衣は最初にいたか。といつと、屋上へと続く階段には佐々木隆と佐々木光、藤崎紗那がいる可能性が高いな……」

美波「早く。吉井達を出陣させて！－！豊が補習室送りにさせられるわ！－！」

雄一「まあ落ち着けつて。西崎、初瀬川聞いたか？」

瑠美「うん。代表が屋上へと逃げたんだって？」

桃子「バカですね。屋上へと逃げても勝ち目はないのに（黒笑）」
いま一瞬だけ初瀬川さんの背後に、黒いオーラが見えたのはきのせいであるづ。うん。

雄二「作戦を変えるとするか…………。全員聞け！！これから、豊の方へ行くグループと屋上へと行くグループに分ける！！だが、言つとくが代表を倒すのは西崎と初瀬川というのは変わらない！！」

雄二の説明によると、まず豊の方へ行くグループは化学と数学の点数が高い人達。

屋上へと行くグループは英語の点数が高いグループが行くらしい。そうなると、メンバー チェンジも必要になるね。

雄二「まず、豊の方へ行くグループには直貴と佑樹に指示をだしてもらう。次に屋上へと行くグループには西崎と初瀬川を屋上へと行かせるために、なんとしても階段でCクラスを撃破しろ！！」

ちなみにグループ分けはこんな感じだよ。

豊の方へ行くグループ

Fクラスメンバー 10人

直貴、佑樹、須川くん

屋上へと行くグループ

Fクラスメンバー 5人

荒さん、秀吉、初瀬川さん、瑠美、姫路さん、僕

教室に残るグループ

ムツツリーー、南谷わふ、島田さん（点数を補充する）

なるべく、屋上へと行くグループの方を優先する「ひしー」。
なんか、要注意人物が三人いるみたいだからね。

雄一「さあ、お前ら覚悟はいいか！…これから戦う相手の中にはこの

クラスレベルじゃないやつが5人いる…！注意して戦つてこい…！」

「…」

教室にいるメンバー

「…おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお…！」

「…」

雄一「おし……出陣だ…！」

そして、僕らも教室を出ていった。

S.i.d.e 豊

舞衣「参つます…！」

豊「こくせー…！」

舞衣「やあああ…！」

豊「おらあああああ…！」

現在の状況。

林舞衣と五十嵐享弥以外のCクラスメンバーを倒した！！
つて、ドラ○エか！！

おつと、自分の言葉にツツ「ミミを入れちまつた。
まあとにかく、この一人以外のCクラスメンバーは倒せたんだよ。
はつきり言ってめんどうかいんだよなこいつら。
さつきから、数学と化学を交互に変えていくんだ。
んなことしなくてもいいのによ。

すると、

「…………」

遠くから（ていうか俺の後ろから）

10人ぐらいの人数が、全速力で走つてくる音が聞こえてきた。

…………
きたか…………

舞衣「な、なんですかあれは！？」

敵の方も驚いている。

やつぱし、あいつらか！！！

Fクラス10人

「…………おおおおおおお…………」

きた！！

Fクラスメンバーだ！！

享弥「もう援軍がきたのかよ！！舞衣！！交代だ！！」

舞衣「分かりました！！長谷川先生！！数学で勝負を

」

佑樹「させるかあああ！！！布施先生。このまま、化学で勝負をさせてください！！試験召喚！！」

Fクラスメンバー5人

「――――試験召喚！！！」

『Fクラス 渡辺佑樹

化学 428点

Fクラスメンバー5人

化学 平均60点×5

V S

Cクラス 林舞衣

化学 128点

舞衣「な、なんですかあの点数は！！！」

佑樹「豊の仇！！緋炎連脚！！！」

豊「いや、まだ俺死んでないから！！！」

まあ、ツツコミをいたけど。

炎にまとった回転蹴りを相手に喰らわし、一発で林舞衣の召喚獣を倒した。

享弥「くそつ……先生数学で勝負を……試験召喚……」

直貴「佑樹下がれ……」

佑樹「うん……」

直貴「数学は俺の出番だ……試験召喚……」

須川「俺も行く……試験召喚……」

「俺たちもだ……試験召喚……」

Fクラスメンバー5人

『Cクラス

五十嵐享弥

数学

328点

V

S

Fクラス

渡辺直貴

数学

518点

Fクラス

須川亮

数学

108点

Fクラスメンバー5人

数学

平均65点×5

『

享弥「こ、こいつら。本当にFクラスかよ！？」

直貴「……つらだつて、勉強してんだよ……風牙絶咬……」

◆クラスメンバー5人

「……………」

享弥「く、くそつ！――」クラスなんかに――」

勝負はついた。

直貴の風のように移動し一直線に切りつける攻撃。須川とFクラスメンバー5人の気合いの攻撃。

享弥「相変わらず強いな。直貴は」

直貴「享弥も。点数が上がつたな」

享弥「誰のおかげで上がったっていうんだよ（笑）」

舞衣一 佐樹くんも相変わらず化学は強いですね

佑樹「待つんだ林さん。僕は他の教科も得意だからね？」

舞衣一あ、そ、う、な、ん、で、す、か、?」めん、な、さ、い、

佑樹「うるさい」（泣）

お前ら、知り合いだつたのかよ。

ていうか、どんだけ知り合いがいるんだよ。

直貴「さあ。後はあいつらの方だな」

佑樹「瑠美さん達。大丈夫かな?」

Side 瑠美

モブA「Fクラスが来たぞ!...」

モブB「所詮はFクラスだ!! やつちまえ!!」

女A「先生!! 召喚許可を!!!!」

遠藤「承認します」

Cクラス10人くらい「「「試獣召喚!!」」

明久「Fクラスメンバー5人は姫路さんが来るまで戦つて!!」

明久が階段で指示を出す。ちなみに瑞希は体力があまりないので、遅れてくる。

私と桃子はある作戦の準備として、現代国語の先生と一緒に、敵に気づかれないように隠れている。

Fクラスメンバー5人

「「「「「了解!! 試獣召喚!!」」」」

『Cクラス10人

英語
平均108点×10人

V
S

Fクラス5人

英語
平均78点×5人

モブC「いや、こいつらFクラスのくせに点数が高くないか!?」

女曰「なにおびへんのよ---やねねよ---」

だけど、

キュポ！！！

「クラス10人
えつ？」

「お、遅れですみません」

英語 Fクラス 姫路瑞希 298点

V
S

英語 Cクラス10人 0点

息切れしながらも、なんとか現地につきてクラス10人を圧倒的な

差で倒した瑞希があらわれた。

モブD「姫路瑞希だと…？」

女C「なんでここにいるのよ…？」

はいはい。

さつさと補習室へいつといで～～～（笑）

明久「よし。後は屋上の扉の前にいる三人だけだ…！」

まだいたんだ……。

ちょっとだけ除いてみる。

うん。確かに三人いるね。

二人の男子に、一人の女子が扉の前に立ち塞がっている。
だけど、一人の女子はなぜか右足と両手に包帯を巻いている。
あれ？

あのこもしかして……、

桃子「紗那……」

後ろで桃子がそう呟いた。
やつぱり。

桃子がCクラスとやりたいつていつた理由のキーワード人物。藤崎
紗那なのね。

紗那「こつからさきはいがせません」

光「通りたいなら、俺達を倒しな…！」

「いぐぞ！……！」

隆・光「「試験召喚！！」」

紗那「試験召喚です！」

明久「…ちもいくよ…姫路さん！荒さん！秀吉！お願ひ…！」

瑞希「任せくださいーーー！」

惠里菜「いきますー！試験召喚ー！」

秀吉「試験召喚じゃ……」

『Cクラス
佐々木隆

佐々木光

英語 278 点

英語 Cクラス

英語 328 点

V
S

Fクラス

姫路瑞希

英語 298 点

エクラス 荒恵里菜

英語 285点

Fクラス 木下秀吉
英語 132点

『

隆「一人だけ点数が少ない……そいつを狙うぞ……」

光「分かつた……いくぞ……」

佐々木兄弟の召喚獣が秀吉の召喚獣を狙う。
しかし、

恵里菜「させません……」

ここで恵里菜がロッドからシールド的なものをして、一人の召喚獣の攻撃を防いだ。
さらに、

瑞希「てええええい……！」

瑞希が剣から衝撃波をだして二人の召喚獣に攻撃をした。

『Cクラス 佐々木隆
英語 289 189点

Cクラス 佐々木光
英語 278 178点

『

光「おい……藤崎……お前も攻撃しろ…………お？」

敵の一人である藤崎紗那が攻撃してこないと気づいた佐々木兄弟が後ろを向くと、

紗那「うつ…………」

隆「…………紗那…………」

藤崎紗那が苦しそうに座り込んでいた。

そこへ佐々木隆が駆け寄る。

隆「紗那！大丈夫か！？」

紗那「う、うん。大丈夫…………」

光「もしかして、いつものあれか？」

紗那「うん…………。ごめんね迷惑かけて…………」

隆「しようがないだろ？お前は悪くない」

紗那「この激痛さえ収まれば平氣だから…………」

明久「…………。遠藤先生。フィールドを解除してください」

遠藤「わ、分かりました」

明久がそう言つたら英語のフィールドはなくなつた。

桃子「紗那！……」

瑠美「あ、ちょ！桃子！……」

いきなり後ろから桃子が飛び出していったので、私も追いかける。

紗那「も、桃子！？あなたDクラスじゃ……」

桃子「わけあつてFクラスになつたの。それより紗那！？その腕と足は！？」

紗那「うん……。あの時の怪我だよ……」

恵里菜「あの時の怪我？」

紗那「ちよつと事故っちゃつてね……」

桃子「…………紗那。じクラス代表はこの先にいるんだよね？」

紗那「うん。そうだよ……」

桃子「通らしてくれる？」

隆「はあ！？そんなの駄目に決まつて（紗那）「いこよ」おい！？紗那！？！」

紗那「だつてビッちにじり、通る」とになつたみたいだからね。いいでしょ？隆

隆「しうがねえな……」

桃子「ありがとう。瑠美ちゃん。いい。」

瑠美「え？ あ、うん」

桃子「遠藤先生もついてきてください」

そして、現国、英語担当の先生を連れて桃子は屋上の扉を開く。

目の前にいるのは近隣部隊一人と、代表小山友香。

ガチャヤ

そして、桃子は屋上の扉をしめる。

桃子「Fクラス初瀬川桃子。近隣部隊一人に現国で勝負します。試
験召喚」

近隣部隊
サモ

1

現代国語 248点

V_s

現代国語 Cクラス
DEAD 近隣部隊二人

L

え？

なに今の？

桃子「やつとあなたと話すことができまスね……」
友香「……！」

友香「は、初瀬川桃子？な、なんであんたがこここに……」

桃子「親友が……、紗那サナが受けた辛さを思いしりなさい……」
ラス代表小山友香に英語で勝負します！

遠藤「承認セイジンします」

桃子「試獣サモン召喚……！」

友香「くつ……試獣サモン召喚……！」

あれ？

なんか、勝手に進めちゃってるよこの人たち。

『Fクラス
初瀬川桃子
389点
英語

V
S

Cクラス（代表）

小山友香

英語

143点

『

残念ながら対戦は次回だよ。
お楽しみに。

ていうか、私の出番はありますかね？

第十一話 Cクラス戦 その2（後書き）

次回Cクラス戦決着！！

桃子のCクラスとやると言つた理由が明らかに！！
そして、瑠美の出番はあるのか！（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5875x/>

バカとテストと召喚獣～バカと未来と過去とFクラス～
2011年11月24日20時51分発行